
ルグレス帝国の皇帝陛下と二人の閣下

藍沢 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルグレス帝国の皇帝陛下と二人の閣下

【Nコード】

N1078P

【作者名】

藍沢 要

【あらすじ】

列強最強ルグレス帝国。

その帝国は三人の人物を抜いては語れない。

皇帝アレクサンドロ、宰相レイエス。

そして元帥マサイアス。

全ては陛下の御為に。

銀と紫電を纏いし獅子

ルグレス帝国。

古代の大戦に勝利し、建国された帝国である。大陸には他にもいくつかの国が建国されたが、ルグレス帝国は自領を守り善政を敷く国として有名だった。

建国から数えて19代目の皇帝ナバレル。皇帝は酒色に狂い、政務を蔑ろにし暴君と化していた。

その皇帝を帝位から降ろそうとし軍事クーデターが発生。次の皇帝の座に着いたのは、クーデターを指揮し、第一線で戦っていた皇帝ナバレルの次男アレクサンドロ・バスキス・ド・ルグレス。

当時まだ13歳。

彼は銀髪、紫目の天使のような愛らしい風貌を裏切って、軍を前線で取り仕切り、自らも戦地に赴き、さながら堕天使の様な笑みを浮かべながら戦局を支配していった。

その彼の傍らには常に二人付き添っていた。

当時わずか15歳のルーカス・レイエス。

それよりもさらに若い10歳のクリスティン・マサイアスである。

クーデターを成功させたアレクサンドロは、すぐさま内政と軍事を

掌握。

レイエスを宰相、マサイアスを元帥に任命した。
当然、反発が起きる。

子供に何が出来る。

玉座は玩具ではない。

声高に叫ぶ高官達を、天使の様な微笑みをしながら皇帝はただ黙認していた。

その後、アレクサンドロは肅正を指示。

レイエスは肅清をリスト作成。

マサイアスはそのリストに沿い、ただ淡々と事を進めた。

リストの第一に名前が挙がっていたのは、前皇帝ナバレル。

レイエスはアレクサンドロに公開処刑を提言。アレクサンドロの許可が下りるなり、大勢の民の前に引きずり出され、炎天下の元処刑が行われた。

処刑方法は斬首。

しかし斬首で納得しないほど、怨みを買っていた前皇帝は民から罵詈雑言を吐かれ、石や瓦礫、ありとあらゆる物が投げつけられた。

「最後の言葉はありますか。父上。いや、前皇帝ナバレル。」

と満面の笑みを浮かべたアレクサンドロが尋ねる。

「こっ…の…獣がああ！！貴様なぞ余の子なぞではないわあ！！貴様を呪ってやる！！呪ってや」

ヒュンと言う音と共に、眼下に映ったのは白い一閃。

それが永き時に渡り民を虐げ、暴虐の限りを尽くした皇帝ナバレルの最後の瞬間見た光景だった。

首が落ちた瞬間、民の凄まじいまでの歓声が広場に満ち、傍らに立つ神の如き笑みを湛えた麗しい若き皇帝への讃辞を捧げる。

新皇帝アレクサンドロの時代の始まりである。

漆黒と紅に彩られた双剣（前書き）

残酷な描写があります。苦手な人は回れ右してください。

漆黒と紅に彩られた双剣

ルグレス帝国新皇帝アレクサンドロには二人の側近がいる。

後世では正しかったと判断されているが、クーデターを起こし玉座を篡奪した事実は動かしがたい。

前皇帝の処刑後、腐敗していた内政を牛耳っていた者達を徹底した粛正で一掃。新たな改革を推進する新体制は帝国民の圧倒的な指示を得た。

しかし、反感を持った高官や軍内部では火種がくすぶっていたのも確かだった。

その火種を大火へと煽ったのが、ルグレスの隣国ザフィーラ国。

争いが勃発したのは、国内における粛正の嵐が止んだわずか一年後だった。

ザフィーラは、隣接していたガザエル公爵に内通を持ちかけ、公爵は甘い蜜に抗う事無くあっけなく陥落。

協力を結んだ公爵は前皇帝時代、勅命を授ったと嘘をつき圧政に喘ぐ領民から更に税収を搾り取っていた為クーデター後、大將位から將軍へと降格させられ不満を募らせていたティラー將軍に協力を依頼。ガザエル・ティラー両名は自領に配置している兵を挙兵。すぐさまザフィーラ軍と同時に帝都近くの街まで侵攻したのである。

皇帝陛下が住まいし王城のある帝都ヴィネガントに配置されている倍近い兵に、帝都陥落は間近だと誰しもが思っていた。

しかし、帝都ヴィネガント侵攻まであと5日というところで突如としてザフィーラ軍が乱れ始める。

ザフィーラの背後にあるアイギス王国が、突如としてザフィーラを攻撃し始めたのである。

元々、ザフィーラとアイギスには以前から婚姻による同盟関係が結ばれており、協力をすることはあっても攻撃されるという事は全く考え難い事であった。

皇帝軍に挟撃される形になったザフィーラ軍は、すぐさま自国に撤退。

残されたガザエル公爵とテイラー將軍の軍はあっけなく瓦解し、敗走した。

「何故我らが負けたのだ…」

敗走し、逃亡途中のガザエル公爵が忌々しげに顔を歪め、ぼそりと洩らす。

「よくわかりませぬ。あの様に都合良くアイギスが出て来てくるなぞ予想だに出来ません。ザフィーラとアイギスの間で何かがあったとしか思えませぬが…」

今にも雨が降り出して来そうなどんよりとした天気の中、逃亡する両軍が森で身を隠しながら進んでいると、その前方に人が佇んでいた事に気が付いた。

黒の長い髪が一つに結わえられ、背中に垂れている。
背は大きくなく、どちらかと言えば華奢な身体をしているようだ。
そこまで認識した瞬間、周りの兵士から悲鳴が上がる。

何事かと声をした方を見回せば、辺りはすでに血の海と化していた。

既に原型が人間であったのかすら判別出来ない程、身体中を切断された兵士があちらこちらに散らばっている。

既に息のある兵士は誰一人残っていないかった。

長年軍で戦を経験したテイラーですら、このような光景を未だかつて見たことが無く、ただただ唾然とした。我に返った瞬間、胃の内容物がこみ上げる。

それをなんとか堪え、蒼白のまま隣のガザエル公爵を見ると完全に腰が抜け、顔面からは完全に色を失い、失禁していた。

「な…なんだこれは…一体何が起こったんだ…一体……」

既に公爵を気にかける事が出来ない中、ガチガチと歯を鳴らせながら呆然と呟く。

「ガザエル公爵とテイラー將軍だな。」

この凄惨な光景に似合わぬ少し高めの幼い声がした方向に視線を移すと、そこにいたのは虐殺が起きる寸前に見た人物。

漆黒の長い髪を持つ華奢な子供。

さつきはよく見えなかったが、貫けるような白い肌をしている。よく見ると、皇帝アレクサンドロに負けない程の美貌を持っている。しかしながらその顔には一切表情が浮かんでいない。

その双眸は血のように赤い真紅。

その姿に思わず息を飲んだ。

両手に握っているのは、とても外見からは想像がつかない、血まみれの双剣。

双剣の血と脂を払い、子供がおもむろに口を開いた。

「お初にお目にかかる、ガザエル公爵、テイラー将軍。私はクリスティン・マサイアス。陛下の使いで参った。」

その言葉に将軍が目を見開く。

「マサイアス…？まさか…貴様…マサイアス元帥か！？」

「いかにもその通り。」

「貴様が！？貴様なんぞガキではないか！！何故私のように武功を上げた将軍が、貴様の様なガキの下に就かねばならん！！」

「宰相といい、このような子供を元帥職に任命した皇帝は一体何を考えなのだっ！！」

正気を取り戻した公爵共々、烈しい言葉が投げつけられたマサイアスは、未だに眉一つ動く事がない。

激昂していた二人だが、あることに気付いて、再び蒼白となった。

「まさか…この仕業…全部お前がやったのか…。」

「全てではないが、ほとんどは。」

「閣下ってば、俺らにほとんど残してくれませんでしたからね。俺ら手応えなくてガツカリです。」

あはははと、マサイアスの部下ラインハルトがその場に似合わぬ軽快な笑い声を上げる。

啞然とした二人を一瞥したマサイアスは、再び口を開く。

「陛下の勅命だ。お前たちをヴェネガントへと連行する。処分については陛下が現在お考えになっていると宰相から聞いているが、覚悟はしておけ。ガザエル公爵。いくら先帝の御身内であろうが、その点は考慮されまい。温情を期待しても無駄だ。おそらく極刑だろうな。」

「なっ…なんだと!?!」

「そして、テイラー。お前は私が管轄している軍に所属しているのは理解しているか。」

「ぐっ…私は貴様なんぞの部下になった覚えなぞないわ!!」

マサイアスにべっと唾を吐き、憎々しげに睨みつけたが次の瞬間、ラインハルトらマサイアスの部下達が、一斉に將軍の首筋に自分の剣を当てる。

「貴様!! 閣下、大丈夫ですか!?!」

「気にするな、ラインハルト。ああ、テイラー將軍、それだけ威勢が良いのならば、ここから帝都までの道程を走って帰るだけの体力もあるな。テイラー。これから4日間ひたすら走れ。休むことも歩くことも許可しない。おい、お前達これから帰都するぞ。お前達は

4日位不眠不休で平気だな。私達と公爵は騎乗し、テイラーは腰に縄を繋げて走れ。ああ、ラインハルト。お前の馬にテイラーの縄を繋げておけ。」

「御意。」

「なっ……!!おい、待て!!ここからヴィネガントまでだど!?馬で走ったとしても、一体どれだけかかると思ってる!!」

「4日で着く。行くぞ。」

その言葉を合図に、マサイアスの部下達が暴れる將軍の腰にすばやく縄を掛け、ラインハルトの騎乗している馬に縄を繋ぐと、そこに乗っている人物は帝都に帰るべく馬の脇腹を蹴った。

マサイアス元帥率いる精銳軍が帰還したのは、宣言通り4日後。すっかり憔悴しきった公爵と共に皇帝の前に引きずり出されるはずだった男は、既に顔面からだけではなく、身体の内側の血を流し、肉が垂れ、骨まで露出した姿であった。

息は既に無かった。

皇帝アレクサンドロの冷徹で麗しい紅い剣。

元帥クリスティン・マサイアス。

当時若干13歳。

皇帝陛下の信頼厚く、帝国軍の頂点に立つその人に、底知れぬ恐怖を感じながらも、抗いがたい尊敬と敬意を抱く軍人が増えた出来事であった。

金と碧玉に覆われた仮面（前書き）

流血表現が少しだけ出てきます。ご注意！！

金と碧玉に覆われた仮面

ルグレス帝国皇帝アレクサンドロには、紅い剣と称される元帥マサイアスの他、もう一人側近がいる。

いつもと変わらぬある日、アイギス王国にルグレスからの使者が突然訪れた。

アイギス王国国王アルファラン三世はその知らせを訝^{いぶか}しんだ。ザフィーラを挟んだ向こう側にあるルグレスとは少量の商業取引こそあるものの、国交は無かったからである。

それに何年か前の前皇帝を廃した軍事クーデター、その後における数年間に渡る粛清の噂。

アイギス王国は何十年も争いらしい争いを起こした事がなく、隣国のザフィーラとも協力関係を結んでいるため、アルファラン三世が即位したそれ以前から平和を守っている。

そんな我が国に何故ルグレスからの使者が…。

皇帝からの正式な書状も持参しているとの事なので、内心疑問を持ちながら使者と会うことにしたのである。

「お初にお目にかかります。私めはルグレス帝国の宰相をしております、ルーカス・レイエスと申します。本日は急な謁見を許可していただき、大変恐縮でございます。」

そこにいたのは、絶世の美女。

いや、身体付きや、着ている衣服、声などからして間違い無く男である。

緩やかに波打つ金髪、繊細そうな鼻筋。まろい形の唇……。ふわりと笑むその眼は、美しいエメラルドを思わせる碧。

あまりの美しさにアルファラン王は目を見はった。

「如何なさいました？」

くすくすと笑いながら柔らかい声で問いかけてくる声で我を取り戻す。気を取り戻して周りを見やれば、自分と同様にかの宰相に見惚れている者が多くいた。

咳払いをして、威儀を正すと、徐に前にいる人物に話しかける。

「いや、なんでもない。そなたがルグレス帝国の宰相か。随分若く見えるが、一体いくつになる。」

「はい、私めは15の時分、我が陛下から宰相の位を拝命いたしました。それから3年が経ちましたから、今は18でございます。」

その言葉に咄然としたのは、アルファランだけではないはずだ。現に、自国の大臣達は目を見開き、口を開けたままだ。

「18？そなたは15歳で宰相を？」

「左様にございます。」

にっこりとまるで溶かすような笑みを浮かべ、肯定をした若き宰相は、一体この国に何をしに来たのであろう。

「我が陛下から書状をお預かりしております。お読みになりましたから、詳しい事は私から説明を致します。」

こちらでございまして側近から渡された手紙を受け取る。

手紙に書かれていたのは『ルグレスの余剰な装飾品を、そちらの国で取り扱ってはもらえないだろうか』という、極単純な内容だった。この程度の内容なのであれば、わざわざ宰相が王に謁見までして取り決める事ではないと思えた。

「何かご質問がございましたか？」

にっこりと笑うその人物に、今まで抱いていた疑問を投げかける。

「この程度の事で、わざわざ国を挟んだ我が国に来たわけではあるまい。一体皇帝は何を考えておるのだ。」

思いがけず強めの声が出た。その事をあらかじめ予想していたかの

ように、くすりと宰相は笑う。

「さすがでございますね。お見通しですか。確かにそれは表向きでしかございません。ああ、しかしながら、それも確かに我が陛下がアルファラン王の許しをもらってこいと仰られた自案でございます。許可を頂けたら幸いなのですが。」

「では一体何が目的だ。この書状に関する事は、お前の言う内容次第で考えても良いし、その逆もしかりだ。」

「ザファイーラの皇太子に嫁いだ貴国の王女様が、ザファイーラ王に常日頃、乱暴をされているのはご存知ですか。」

王の言葉を遮るように放たれた言葉に、謁見の間が水を打ったように静まり返る。アルファラン王はあまりに想像を超えた内容に、ただ穴が開くほど、それを言った男を凝視した。

「な…なにを…何を申す!!!!!!」

我に返り、部屋を震わせる程の怒声を浴びせかけたが、男は尚も笑っている。

「事実にございますが？うちの元帥が誇る諜報部をザファイーラに送り込みまして得た情報にございますので、間違いは有り得ません。なんでも、皇太子は皇太子で身分の低い女に寵を注いでおられるご

様子。それを突き付けられ、傷心の王女様を御自分の後宮に引きずり込んだとか…。

お劳しい事でございますね。」

怒りでわなわなと震える体が止まらず、隣の王妃を見やれば、彼女は完全に顔から色を失っている。

ザフィーラ皇太子に嫁いだアイギス王女は、自分達の愛する娘。いくら王族には愛が不要だと言われていても、アルファラン王と王妃は仲睦まじく、子供達にも愛情を注いで育てた。

その大切な娘が、何故その様な事になっているのかがわからない。

「陛下、気をお静め下さい！おい、レイエスとか言ったか。お前が言った内容を我々が信じるとしても！？ザフィーラは我が国と同盟を結んでいる。それなのに、かような無体な真似を妹が受けている筈がない！！」

アイギスの皇太子であるゼルエルが叫ぶ。

激昂しているゼルエルを不憫そうに見るレイエスは、「では是非ともお確かめになれば宜しいでしょう。」と口を開いた。

「お確かめになられて、確信が得られなかった場合は、私を殺して下さって結構でございます。我が陛下もそれをご承知ですから。ザフィーラに間喋を送りこみ、確固たる証拠を得るまで私を監禁されてもなんら問題はございません。」

「そこまで言うか。そんなに自信があるのなら、ザフィーラに確認せねばならん。陛下、私を使節としてザフィーラに行かせて下さいませ。」

王はゼルエルとレイエスを見やり、了承する。

かくして速やかにアイギスは使節団を組み、ザフィーラへと旅立った。

彼の人は一国の宰相と言うこともあり、王宮内の一室をあてがわれ、逃亡出来ぬ様に昼夜を問わず監視が付けられた。

数十日後、帰国した我が息子の顔を見て、信じたくないと思っていた情報が正しかったと証明された。

執務室に通した後、重い口調で話し始めたゼルエルが話した内容は、更に衝撃的なものだった。

「酷いものです。私には必死に笑顔を造っていましたが、夜が近づくにつれどんどん恐怖に顔が強張っていくのがよく分かりました。まさか私達が訪ねている間も伽をしていたとは…。」

「なんだと…っ」

「皇太子は表立って寵姫という賤しい女を連れている始末…。あれでは余りにも…っ」

「なんと…なんと言うことだ…。」

余りの衝撃に立っている事が出来ず、頭を抱え座り込む。

「どうすれば良い…どうすれば良いのだ…。」

唸るように呟いた言葉に誰もが口を噤む。

「ザフィーラ王に正義の鉄槌をお下しなさいませ。」

鈴を転がす様な声がした方向を見ると、そこにあったのは、憂いと
憐れみを湛えた碧玉の眼。

静かにアルファラン王とゼルエルに近寄り、レイエスは口を開く。

「近い内にザフィーラは我がルグレスに攻め入ります。」

その言葉に驚いたのは、二人だけではない。警護をしている近衛兵
や、そこにいた侍女まですら息を飲んでいる。
真っ直ぐにこちらを見ている視線は鋭い。

「近い内にザフィーラの首都を守る兵力は、我が国に向かって来るために半分にまで減ります。そこを是非とも叩いてもらいたい。」

「お前…まさかこの為に来たのか…」

その言葉に、眩しい程の笑みを返す。この笑みで一連の行動が繋がった。

「アルファラン陛下。正義はアイギス王国側にございます。もし、お立ちになるのでございますのなら、我がルグレスは協力は惜しみませぬ。」

そして、一息置いてはつきりと断言する。

「ザフィーラにアイギスの正義の鉄槌を。」

開戦か否か。

連日続いた議論に終止符が打たれたのは、レイエスに宣言されていた通り、ルグレスにザフィーラが進軍した報であった。

「陛下：今が好機でございます！！すぐさま軍勢を整えて、ザフィーラ王を討ちましょう！！」

「陛下、ご決断を。」

「お待ちください！！今出ても、我らはザフィーラに勝てる保証はございません！！」

様々な言葉が飛び交う中、アルファラン王は沈黙を破る。

「我らが勝てぬと、娘はあのケダモノに蹂躪され続ける…。しかし、我らが勝てる保証はどこにもない。」

その言葉に一同は押し黙る。

「勝てますとも。」

美しく笑うレイエスがはっきりとした言葉を紡ぐ。

「勝てます。」

確信を込めた声で言われる。
その言葉でアルファラン王は腹を括った。

ルグレスに進軍していたザフィーラの背後を付く形で、参戦したアイギスは善戦。

ザフィーラがルグレスから撤退した後も、一進一退の状態ながらも決して後退することなく、ザフィーラの首都に侵攻。

遂には、首都陥落。

ザフィーラ国が、長年戦をしていなかったアイギス王国に敗北したのである。

ザフィーラ王、並びに皇太子は処刑された。

戦後処理をしている中、ルグレスに帰国していたレイエスが、黒尽くめの小さな人物を伴い訪れた。

「お久しぶりでございます。遅くなりましたが、戦勝。おめでとうございます。我がルグレス皇帝からも祝いの品を賜っております。どうぞ、お受け取り下さい。」

「おお、レイエス殿！久しいな！！息災そうで何よりだ。その方の皇帝にも宜しく言っておいてくれないか。して、祝いの品とは？」

レイエスは隣の人物を見やり、その黒尽くめのフードを落とした。軽く笑んで、その背を軽く押す。

その人物をよく見ると、まだ小さな子供。少女のようだがよく判断出来ない。

黒の長髪を一つに纏め、背に垂らし、紅い双眸で無表情でアルファラン王を見ている。

白く抜けるような肌をして、こちらを見る様はまるで人形のような印象を与える。

「その子は？」

「我がルグレス帝国の元帥、クリステイン・マサイアスでございます。どうぞ、お受け取りを。」

「は？」

何を言われたのか理解出来ない。

この宰相は一体何と言った？

深く考えている時間は無かった。

周りからは悲鳴が上がり始め、気付いた時には近衛兵が既に何名かしか残っておらず、居たはずの兵は全て血まみれの肉となっていた。

「クリス、お前もう少し手加減してもいいだろ。もうこれだけしか残ってない。」

「手加減なんてしたら相手に悪いだろう。死んでも死にきれん。」

「ははっ！手加減したからって死ぬことには変わらないだろう。」

「まあな。」

まるで場にそぐわない調子で話している二人を見て、震える声で必死に答えを探す。

「れ…レイエス殿…これは一体どういう…」

残った近衛兵に囲まれるように守られたアルファラン王を、一瞥したレイエスはその美しい顔に嘲笑を浮かべる。

寒気がするほど残酷な笑み。

「流石アイギス。あんな簡単に騙されるなんてな。普通は騙されないが。統べる国王は平和ボケし過ぎて、言われた言葉が嘘がどうかも判断出来ぬとは。致命的で民が哀れになる。」

「嘘…！？だがゼルエルが見たと…っ！！」

「あああれか。真実を知りたいか。アルファラン王。」

こちらに少しずつ近付きながら、驚愕の真実が紡ぎ出される。

「あんたの娘は、自分からザフィーラ王に近付いて、後宮にも自分の意志で入ったんだ。傷付いたのは、皇太子の方でな。寵姫だと思っていた娘は皇太子の異母妹だ。公式には明らかにされていないが、れっきとしたザフィーラ国の王女だ。」

「な…っ!!」

「夜が近付いて顔色も悪くなってくるだろう。せつかく王とイイコトが出来るのに、兄貴がいるんだから。でも関係なくやってたみたいけどな。」

「最悪だな。」

くつくつと笑うレイエスと、マサイアスが止めを差すその言葉を聞き、アルファラン王はカッとなる。

「貴様らあ!!」

「ああ、それから、アイギスだけど。うちの陛下が今現在侵攻中だ。俺はここで残務処理なんだよな。退屈だ。あっちに行きたかったが仕方がない。」

「私も早く陛下に合流しないといけない。さっさと終わらせたいのだが、いいか、ルーカス。」

「ああ悪いが、あともう少し。アルファラン王、俺はあんたに『勝てる』と言った。何故アイギスが勝てると思ったんだ？」

何を言われているのかわからない。
理解出来ない。

「俺が『勝てる』と言ったのは、ルグレスの事だ。アイギスじゃない。まあ、一つだけ褒めたいのは、ザフィーラに勝った事だ。まさか勝つとは思わなかった。俺としたことが読み間違えた。だが、嬉しい誤算とはこの事なんだろうな。」

「私は、ザフィーラがあそこまで持ちこたえられなかったのは意外だったぞ。いくら挟撃の形になったとは言え、脆すぎたな。」

「ま、どっちにしてもルグレスの敵じゃなかった。それでは、アイギス王国アルファラン三世。さようなら。」

ひらひらと嗤いながら手を振って、マサイアスの肩を叩く。

「最期に一つだけ教えてやろう。ルーカスの言葉を信じるな。あれが真実を話すのは陛下と私だけだ。」

それがアルファラン王の聞いた最期の言葉になった。

皇帝アレクサンドロの美しい極彩色の仮面。

宰相ルーカス・レイエス。

当時18歳。

ルーカスの謀略により、ザフィーラ、アイギス両国はルグレス帝国の属国となった。

微睡み（前書き）

皇帝視点です

微睡み

「アレックス」

誰かが呼んでいる。

多分ルーカスだろう。

あの鮮やかな仮面の下はどす黒い。だが、それを知るのは、僕とクリスぐらいだろう。それ位、ルーカスは虚偽を纏う。

あの眩しい微笑みをたたえながら、いくつも拠点を陥落させた。勿論内部崩壊を誘って。

だから宰相の位を授けた。ルーカス以外にその座は考えられないから。

「アレックスはお休みか」

ああ、クリスだな。

表情が乏しいあの子の感情の起伏が分かるのも、やはり僕とルーカスだけ。

血肉飛び交う戦場で、幼いあの子は微動だしなかった。むしろ、自軍の誰よりも手柄を上げていたのは賞賛に値する。

だから、元帥の位を授けた。クリス以外に血で血を洗う戦場に、信頼を持って死ねと命令出来る人間なんていなかったから。

「しかし、寝てればアレックスは天使のようだな。」

「起きてたら真逆な悪魔だからな。他の奴らが何故気付かないのが不思議だ。」

「猫つかぶりが巧いんだよ、アレックスは。昔から何匹も猫背負ってたぞ。」

「ルーカス、アレックスは猫つかぶりだとお前に言われたくないと思うぞ。」

全く仕方ないな。と言う風情で言うクリスに思わず笑みが浮かぶ。

「そうでしょう、陛下。」

「既に起きてるのはわかってますよ、陛下。意地が悪いですね。」

やっぱりバレてたか。黙って聞いてたかったんだけどな。だけど、意地が悪いってなんだ、ルーカス…。
眼を閉じたまま二人の居る方に寝返りをうつ。

「もう寝かせてよ。だけどさあ、ルーカスに意地が悪いって言われたくないんだけど。僕は君より悪くないでしょ。ねえ、クリス。」

「私に聞きますか。」

「聞くさあ。」

へらりと笑って起き上がる。椅子に座ったまま寝ていたので、身体が痛い。

うーんと唸りながら、身体を伸ばす。バキバキと骨が鳴るのがわかるようだ。

「で？」

椅子に座り直し、足を組んで自分の腹心達を見やる。

たった一言の言葉で、自分が何を言おうとしているのかを判断した、宰相が口を開く。

「首尾は上々ですね。ザフィーラの方も、クリスが直に出向き、裏が取れました。いけます。」

「軍は、テイラー將軍辺りが動きそうです。あれは相当処分に不服があると聞き及んでおりますから、動き出すとしたら脇目も振らずに帝都まで突っ込んで来るでしょう。」

「ふうーん。ねえ、クリス。こっち来て？」

クリスに手招きをして、そのまま膝に座らせる。この子は自分と3つ離れているとはいえ、13歳。まだまだ華奢だ。

一つに結わえ背中に垂らした髪を解く。サラサラとした吸い付く絹の様な感触が心地良い。

「ねえ、クリス。また君、危ない橋渡ったでしょう。駄目だよ、君は僕のものなんだからさ。」

紅い目を覗きこみ、問いかける。

無表情な顔には感情が一切感じられない。ただ、こちらをじっと見つめ返しているだけだ。

「陛：アレックス。クリスが困ってるぞ。放してやれ。」

「ええ？ やだね。ルーカス、ヤキモチ？ 男のヤキモチはみつともないよねえ？」

ねえ？ とクリスを抱き締めたまま、首を傾げてみせる。相変わらずの無表情だ。

無表情なままのこの子は、そのままルーカスにすくい上げられ、幼子が抱き抱えられるような体制で、ルーカスの腕の中に収まった。

「全く油断も隙もない。アレックス、クリスに手を出すなど言っただろう。何回言えばわかるんだ。」

「ふふふつ、何回だろうねえ？」

くすくすと笑いながら二人を見る。

抱き上げた方は呆れた表情で、抱き上げられた方はきょとんとした顔で僕を見ている。と言っても、無表情なので雰囲気だが。

「ルーカスさあ、わざわざクリス行かせなくてもいいんじゃないの？ 君にだって、直属の諜報員いるでしょうに。」

「ま、そうなんだがな。クリスが行くって言うもんだから、押し切られた。」

「…私が行っては駄目なのか？」

クリスがルーカスの腕の中で身じろぎをする。それを見て、僕達は揃って溜め息を付いた。

「ねえ、クリス。君、自分が女の子だっていうのわかってる？」

「それが？」

尚も訝しげな眼差しで問いかけられたが、これは言っても無駄だろうなと思い直した。

大体、10歳の女の子を軍事クーデターに誘い込んだのは僕だし、その後、軍の最重要役職に付けたのも僕だ。今更感が否めない。かと言って、ルーカスも反対はしなかったけれども。

皇帝のお抱えの暗殺一家に産まれた彼女は、生後2年目辺りから暗殺家業を徹底的に仕込まれている。

初仕事は5歳の時、大臣の内の人、伯爵家の一人息子の暗殺だった。初仕事ながら、完璧な仕事をした彼女を僕は手に入れた。

年が近かったというのも理由の一つだが、幼い子供の無邪気さが全く感じられない、妙に達観した表情が気に入ったから。

クーデターの際に、自分の一族郎党を自らの手で葬り去った彼女は、今や自分の大切な臣だ。

ルーカスとは言えば、名門レイエス公爵家の出身である。

レイエス家は過去に何人か皇妃を嫁し、その影響下で帝国内で権力を掌握した家柄だ。

ルーカスはその家の三人兄弟の末子として育てられた。だが上の二人は愚鈍とも言って良い。良いのは見た目だけで、知識も才能も全く欠落していた。だが、嫡男として公爵を次ぐ長男と、愚かな皇帝に媚びへつらい、官位を得た次男と違い、ルーカスはただひたすらに怠惰に過ごしていた。

レイエス家の子という事で、年上の遊び相手に選ばれたルーカスは、僕にこう言い放った。

「お前は何匹猫をかぶってるんだ？」

と。幼少時から取り繕う事に慣れていた僕は、僕を一目で見抜いたルーカスに興味を持った。

話してみると、ルーカスは実に腹黒かった。まだ8歳になろうかと言う頃から腹黒かったのである。

「君さあ、僕のものになる気はない？」

「俺が？」

「そう、君が。君みたいに頭のキレるのって僕知らないんだよね。君、あのバカな兄達よりよっぽどレイエス家を継ぐ方がいいと僕は思うよ。」

「ははっ。お前、さすが猫かぶりだな。皆に評判の天使様は実は悪魔とは。面白いな。」

「それにさ？」

にっこり彼に笑いかけ、問いかける。

「僕が皇帝になるのを近くで見たいでしょう？」

一瞬息を詰め、目を見開いたルーカスは、次の瞬間爆笑した。その光景を見ながら、僕も笑う。腹を抱えて笑っていたルーカスは、ようやく笑いが収まったのか、目を拭いながら姿勢を直す。

「やはりお前は面白い。いいぞ。俺はお前のものになってやる。俺の知識も才能も全部お前のものだ。お前の手となり、足となり、駒となって動いてやる。」

「そう？ 決まりだね？」

「ああ。」

そして時間は流れた。

クーデター後、粛清リストの中に盛り込まれたレイエス家の面々に笑いが止まらなかった。

僕は腐敗した官僚と幕僚のみをって言い付けたはずなのに、ルーカスの愚鈍な兄達が二人とも載っていたからだ。彼らは別に上層部に

絡んでいない。まあ、子供騙し程度の着服はしていたが。

兄二人を処刑した後、ルーカスはレイエス家を継いだ。

念の為、レイエス公爵、ルーカスの父は病状が悪化したのだそうだ。
ルーカス曰わく。

「ねえ、クリス。ルーカスなんて止めてさ、僕の後宮に入らない？」

「アレックス」

不機嫌極まりないルーカスの声に思わず笑いがこみ上げる。

いいじゃないか、別に。二人とも僕のものなんだから。

立ち上がり、ルーカスの腕の中にいるクリスの頬を両手で包み込む。
無表情なまま彼女は首を傾げたので、黒い髪がサラサラと流れる。

「女の子なんだからさ。顔に傷とか付けちゃ駄目だよ？」

「わかった。」

こつくりと頷くクリスに顔を近づけ、そのまま彼女の唇を奪う。

上からルーカスの刺すような視線を感じているが、気にせず更に深く彼女の唇を貪り続けた。

苦しそうな吐息が聞こえてきたので、唇を解放してやると、無表情だった彼女の頬が少し赤く染まり、紅い双眸は潤んでいる。

この顔がヤバいんだよねえ。まだ13歳でこれかあ。大人になった

ら相当キそうな感じだよなあ。よくルーカス是我慢してると感嘆する。

頬をそのまま一撫でし、ルーカスを見る。

美女の様な顔が歪んで、如何にも不機嫌そうだ。その顔を見て、僕は満足する。

ああ、これクリスお仕置きされちゃうかなー。
ふふっとほくそ笑んで、二人を改めて見やる。

「さあって、僕は仕事しようかなあ。二人とも、これからする事があるんでしょう？ 気をつけて行つていだよ。」

「ああ、する事があるなあ？ クリス。」

じろりと言った風にクリスを睨め付けたルーカスは、そのままクリスを抱えたまま去り際に「じゃあな」と一言言い残し、執務室を出て行った。

これから、ルーカスはアイギスへ行き、王家の人間をその毒牙にかける。

クリスは帝国内の不穏分子を一掃するために、再びその手を血に染める。

全ては僕の指示通り。

彼らは僕を裏切らない。

だって彼らは僕のものだから。

享楽（前書き）

宰相視点です。

享樂

「ルーカス、もう終わったから、私はアレックスのところに合流するぞ。」

アイギス国王を易々と殺害し、この場を血の海に変えたクリスが無表情、無感情なまま淡々と言葉を紡ぐ。

血をまともに被ったクリスは、ポタポタと血を滴らせてそのまま出て行こうとしているので、眉を顰め引き止めた。

「クリス、こっちへ来い。お前血まみれだぞ。」

「それが？」

「とにかく。こっち来い。」

首を傾げながら、自分の方へ歩いて来たクリスにべったり付いている血を、ハンカチで拭う。

せつかくの美しい黒髪に他人の血がこびり付いて、ごわついている。それが堪らなく不快だ。

「クリス、お前血を避けられるだろ。わざわざ血を被る必要なんてないじゃないか。」

「アレックスが血を被っても問題はないって言った。」

「またアレックスか…。」

「ルーカス？なんで怒ってる？」

顔を拭かれながら無表情ながらも、きょとんと自分を見てくるクリスにため息をつく。

確かに俺とクリスはアレックス：ルグレス皇帝アレクサンドロの所有物だ。俺は自ら進んでアレックスの駒になった。それに後悔はしていない。

初めて城に上がりアレックスに会った時に感じた違和感は、言葉に表し難かった。

周囲の人間は、天使の様な愛らしさと慈愛の心を持つ王子だと手放しで絶賛していた。だが、実際のアレックスは兄の皇太子殿下を愚か者と見下し、父であるナバレル皇帝を無能と評していた。

時折その紫電の眼に宿る嘲笑を何に例えるのが適切だったのか。俺には、この自分より幼い子供が恐ろしく、何よりも面白く感じていた。

「僕が皇帝になるのを近くで見たいでしょう？」

そう言われて、俺は全てをアレックスに託す決意した。

元々俺は、レイエス公爵家の三男坊だが実際は違う。レイエス公爵はレイエス公爵でも先代の公爵、つまりは現レイエス公爵の父に当たる人物、それが俺の実父だ。

先代は昔から女癖が悪かったようで、爵位を息子に譲り、自らは隠居した年になってからも女を囲っていたらしい。俺の母に当たる人物も、その囲われていた女の中の一人だ。

女が身ごもった事がわかると、先代は柄にもなく喜んだ。老いた自分にも、まだまだ男としての機能があったことがわかったのが嬉しかったのかはどうかはわからないが、妊娠した女を甲斐甲斐しく世話したらしい。

ただ、レイエス公爵家の醜聞となることを嫌った先代は、息子の現レイエス公爵に生まれてくる子供を、自分の子供として育てることとした遺言を、息子に向けて残した。

その遺言は、俺が生まれてから直ぐにその効力を発揮した。生後間もなく、先代は死去し、俺は現レイエス公爵家に息子として引き取られた。

ただ、正妻の子ではなく、レイエス公爵の愛人が産んだ子として。

俺の実母は、俺を産んだ後、レイエス公爵の情婦となったらしい。俺は一度も会ったことがないので詳しくは知らないが。

レイエス公爵。実際は俺の異母兄なのだが、書類上は父である。その父は、俺に対して一切の愛情を見せなかった。父だけではなく、母や二人の兄――実際は義姉や甥なのだが――にも冷遇された。それだけではなく、レイエス家に使えている使用人ですら、俺を見下していた。

万事がそんな感じなので、俺は毎日をただ無気力に過ごしていた。しかしながら、頭の方は天武の才か、幼い頃から兄二人を早々に追い越し、アレックスに会った当時では、既に高官レベルの勉強をしていた。

そして母親の血を継いだのか、俺は忌々しいほどの女顔だった。この顔が役に立つのは後々になってからのことだったが、当時は男の格好をするより、俺への嫌がらせから女の服装を着せられた事が多かったように思える。

当然、兄二人には苛められ、助けてくれる味方なんていない中で、俺はアレックスに出逢った。

アレックスの駒になった後から、レイエス家での待遇が少しだけ変化した。兄二人は愚鈍なので、アレックスや皇太子の学友には成り得ず、父のレイエス公爵は、俺がアレックス王子と学友になった為に、王宮内での鼻も高かったはずだ。今まで無視していた俺に声をかけるようになっていた。

しばらくして、父から許可が出た社交界に顔を見せるようになると、女達が寄ってきた。貴族の娘や、未亡人。その度に、忌々しかった顔に纏った笑みが役に立ったと思う。なにせ、俺より美しい女はいなかったから。

ただ、ヤバかったのは裏で声をかけられた貴族の御曹司連中だった。こいつらは俺が聞いた話だと、男色愛好家会なるもののメンバーらしい。悪いが俺にはそっちの興味は全く無い。

しかし腐っても貴族なので、当たり障りのない会話をし、そのままそいつらとは別れた。

それからしばらくして。

俺はクリスと出逢った。

「ルーカス、この子クリスティーナ。マサイアス家の女の子。お願いして僕が貰っちゃったんだー。可愛いでしょ？」

「貰ったって…マサイアス家って皇帝お抱えの暗殺一家のか？」

「そうだよお。この前メイフィールド伯爵のバカ息子が死んだでしょ？あれやったの、この子。しかも初仕事。頼もしいよねー。」

ねーえ？と可愛く言いながら、アレックスはクリスティーナと呼ばれた女の子を抱き締めている。

メイフィールド伯爵のバカ息子と言えば、帝国大臣家の一つ、メイフィールド伯爵の一人息子。以前俺が誘われた男色愛好家会なる集団の筆頭メンバーではなかったか。その男が殺害されたという噂は瞬く間に知れ渡った。

まさかそれをやったのが、こんな小さな女の子だったとは…。
いささか信じられず、マサイアス家の人間を凝視する。

長い黒髪が真っ直ぐに腰まで伸びている。眼は珍しい紅。肌は透き通るほど白い。人形のような可愛らしい子供であるが、表情が全く無い。

王子であるアレックスに背後から抱き締められ恥ずかしがるわけもなく、かと言って憤るでもなく…この子には、自分の感情と言うものがないのだろうか。

「アレックス、この子幾つだ。お前より年下じゃないか？」

「えーっと。クリスティーナ、君今何歳？ちなみに僕今8歳で、こっちのルーカスは10歳だよ。」

「…5つ…」

「5歳だってー。声も可愛いねえ。」

むぎゅーっとアレックスに抱き締められているクリスティーナに瞠目する。

5歳…。こんな年端もいかない子供が暗殺者だとは。しかも全く悪びれる風もない。これが皇帝お抱えのマサイアス家の実態なのか…。

「クリスティーナ。お前はアレックスの専属の殺し屋になるのか？」

「…さあ？どうするんだ？王子。」

「アレックスでいいよ、クリスティーナ。うーんとねえ…君さ、僕が皇帝になったら、元帥にならない？で、ルーカスが宰相。悪くないでしょ？」

くすくす笑いながら、えげつない事をサラリというこの王子は本当に面白い。ちらりとクリスティーナを見ると、別にどうもしないという顔をしている。

「ね、ルーカス。クリスティーナが元帥になるのって難しいかなあ？ 女の子だもんねえ。」

「そうだな。軍に女は生きにくいだろう。だが、クリスティーナはマサイアス家の人間だろう。いくら子供だろうが、帝国の准将クラスの人でも、手が出ないほどの力あるぞ。しかしな…。」

「うーん、じゃあさあ、女の子だって知ってるのは僕達だけにしようか。名前もクリスティーナから、クリスティンに変えよう。それだったらいいんじゃない？ ね？ クリスティーナ？」

「…それでいいなら私は構わない。」

「じゃあ決まりだねー。」

問題は解決とばかりに破顔したアレックスは、クリスティーナの頬にキスをした。

おいおい、子供のたわいのないイタズラだって言うのはわかるが、お前は一応王子だろう。

一方、されたクリスティーナの表情は一切変わらない。ただ一言ポツリと零した。

「初めてそんなことされた…」

ああ。この子も俺と同じ。誰にも愛情を与えられずに育ったのか。

クリスティーナの黒い髪を撫でてやる。柔らかく絹のような手触りがする。ふと、思いついた事をアレックスに言ってみる。

「アレックス。お前にクリスティンはやる。クリスティーナを俺にくれ。」

言われた言葉が意外だったのだろう。アレックスは珍しくポカンとしている。暫く俺を見た後、クリスに目を移し、ニコリと笑った。了承したという意味で取っても構わないんだな。アレックス。

それから5年後。

俺とアレックスの密約通り、アレックスは皇帝に。俺は宰相に、そしてクリスは元帥になった。

アレックスが皇帝になった時に行った粛清で、邪魔だった兄二人をリストに載せた。あいつらは国庫から微々たる金額を着服していただけだったが、俺がレイエス家の家督を継ぐのに、あの愚鈍どもは必要ない。最も、生かしておいたところで、顔だけの世間知らずな長兄では、すぐさまレイエス家を没落させたであろうが。

父のレイエス公爵は、持病が悪化した。とは世間向きで、実際は何年も前から毒を盛られていたのだ。盛っていたのは、奥方だ。

愚かな女だ。

散々俺を蔑んでいたくせに、俺の身体が大人になるにつれ、あの女は自分から誘ってきた。クーデター前の当時、既に女の身体を知っていた俺は、暇だったし、奥方のあからさまな誘いに乗った。

旦那は俺の实の母親に夢中らしく、暫く帰って来ていない。鬱積していた性欲が、あの女にはありすぎた。そして俺に対しての独占欲と他の女に対しての嫉妬心が出てきたのだろう。いい加減うっとうしいと思っていた頃に、あの女は自分から言い出した。

「ねえ、どうしたらあたくしだけを見てくれるの？他の若い女の方がいいの？」

「そんな事はないです。あなたの事だけ見ていますよ。」

「嘘ばっかり！！知っているのよ？アレクサンドロ王子の遊び相手にと連れて来られたという、クリステインっていう子、あの子が貴方は好きなのでしょう！？」

「なにを愚かな事を仰います。あの子は男の子ですよ。ご承知でしょう？」

「違うわ！！あの子は女の子よ！！知っているのでしょう！？何故あたくしに嘘をつくの！？どうしてあたくしだけを見てくれないの！？」

ちっ。：この女に知られていたとは誤算だな。広まらないうちに始末するか。もうこの身体も飽きたし。

何より、俺はこの女のような醜悪なイキモノになぞ興味はない。

「では…俺のために何でもしてくださいますか？」

女の顎を持ち上げ、目を合わせる。そこに浮かべたのは、極上と称されている笑顔。

「…レイエス公爵の爵位を俺に下さいませ。」

「そ…そんな…。どうやって。あの人がまだ爵位を持っているもの。貴方が継げるわけが…。ルーカス…まさか…あたくしにあの人を殺せと…？」

「お願いいたします。母上。」

「ダメよ…できないわ…いくら貴方の頼みでも…」

「では、もう俺達は終わりにしましょう。もうあなたとは一切こういった事をしません。他の女の元へ行きます。」

「そんなっ！！ダメよ！！お願い、行かないで！！何でもする！！何でもするから！！」

「本当に？」

「約束するわ。貴方を失う方が恐ろしいもの…。」

「素直で可愛い人ですね、母上は…。」

そのまま顔を近づけ、女と唇を合わせた後は、彼女に好きにさせる。俺の頭は酷く冷静で、煩く喘ぎ声を上げ、腰を振っている女をだだ醒めた目で見ていただけだった。

父に毒が盛られていたという事は、家内で隠密裏に処理され、ついでに盛った犯人は自殺という形で幕を降ろした。あの女は、最後の最後まで俺に利用されてくれた。ある意味、愚直さに感謝だ。

「ルーカス、君さ、レイエス公爵に何したの？」

「俺が？ あれは、持病が悪化したんだ。年も年だったしな。」

全部わかっていいるだろうに、アレックスはわざわざ俺に聞いてきた。俺はただ、ふっと笑っておいた。にこやかに笑いながらアレックスは、クリスを撫でていた。

「酷い男だねえ、ルーカスは。ね、クリス。ルーカスは止めておきなよ。」

「止めるも何も…私はアレックスとルーカスのものなのだろう？」

「ま、そうなんだけどね。」

「アレックス、もういいだろ。おいで、クリスティーナ。」

クリスを引き寄せて、抱き締める。

あの女の匂いが身体に染み付いている気がする。クリスを抱き締める事で浄化はされないのだろうか。

クリスの、何者にも汚されない魂が俺には眩しく、羨ましい。クリスはどんなに血にまみれようと、その根本は真っ白で穢れがない。だから、俺もアレックスもクリスを手元に置きたい。自分達がどれだけ汚い事に手を染めているかを知っているから。俺達が持ちえない、抗い（あらが）難しい穢れなき魂。

この思いが恋なのか、執着なのか、憧れなのか。

愛なのか。

俺は自分の穢れを浄化してもらいたい。クリスティーナ以外にはそれが出来るなんて有り得ない。

多分アレックスもそうなのだろう。

だから俺は、アレックスの駒であると同時に、クリスの目付にもなった。

クリスティーナは俺のもの。

誰にも渡すつもりはない。

「もう落ちただろう？もう行くぞ。」

丁寧に血を拭かれたクリスが身じろぎをする。
早くアレックスと合流したいのだろう。

「クリスティーナ。」

ピクリとクリスが反応する。普段は表情が無いくせに、クリスティーナと呼ばれると少しだけ――俺とアレックスがわかるだけだが――表情が表れる。

その顔が嬉しくて、ついクリスティーナの唇に付いた血を舐めた。
そのまま唇を重ねて、互いの口の中に血の味が広がる。

錆びた鉄の味がする。思わずキスに夢中になっていたら、背後に敵の気配がした。

その瞬間、クリスの双剣の一本が敵の喉に刺さっていた。

「ルーカス…もういい。」

息も絶え絶えなくせに、眼はすでにクリスティンになっている。
ああ、もう少し味わいたかったんだが。

「名残惜しいが仕方ないな。クリス、早くアレックスの所に行つてやれ。」

「ああ。そうだ、ルーカス。」

「どうした？」

「少しだけ、抱き締めてくれ。」

両手を広げて、俺の腰に抱きついてくる。クリスが甘えてくるのはめったになく、一体どうした事かと訝る。華奢な身体を抱き締め、髪を梳きながらクリスに問いかける。

「どうした？」

「何でもない。もう少しだけ。」

「そうか。」

クリスの好きなままにしておこう。

普通なら甘えても許される年なのだし、これからアレックスと共に再び血にまみれるのだろう。

不本意ながら、クリスは血が似合う。生まれついた暗殺者。

だが、俺のクリスティーナだ。

感情と表情の乏しい、可愛い可愛い俺のクリスティーナ。

「行ってこい、クリス。ちゃんとアレックスと一緒に戻ってこい。俺は待ってるから。」

「うん、行ってくる。」

俺の腕の中から抜け出し、先程刺し殺した刺客の首から剣を抜き取り、ひらりと扉に向けて歩いていくクリスを見送る。

俺の身体から、クリスティーナの暖かさが消えていく。
だが、クリスティーナが戻ってくるのは俺の腕の中だ。

俺はアレックスの忠実な駒。

クリスはアレックスの忠実な狗^{いぬ}。

クリスティーナは俺のもの。

絶対に誰にも渡さない。

迫憶（前書き）

ラインハルト視点です。

追憶

「閣下、お疲れのご様子ですが、大丈夫ですか？」

俺の絶対的な上官であるマサイアス元帥の眠そうな顔を見て、思わず声をかけた。

最近、閣下は多忙であられる。

ザフィーラ国と帝国内の反乱勢力が手を結んだ事による鎮圧作戦、その後にアイギス王国に侵攻した陛下への従軍、侵攻道中のアイギス国王の暗殺に到るまで閣下は全て自ら赴いていらっしゃる。

いくら元帥と言えど、まだ閣下は13歳。俺よりも15も下の、下手をしたら街角で遊んでいてもおかしくない年なのに、閣下は元帥という軍の最上位に君臨している。

俺が軍に入隊したのは15歳の頃。入隊した頃は、前皇帝の圧政が国内を蝕み、民が軍の隊員を見る視線が厳しく、恐怖に満ち満ちていた。

そんな時期に入隊した俺は、自分の力に思い上がった若造にすぎなかった。新兵だった俺は、上官の命令に絶対服従、現場では自分の力を誇示し、結果、俺は同期兵の中でも出世は早く、いつの間にか少佐へと昇格していた。

俺が出世したのと同時に、軍の中で密かに囁かれている噂があった。なんでも、軍内発のクーデターが行われるかもしれないという物騒

極まらない噂話だった。

俺の当時、直属の上官だった准将から秘密裏に噂の検証をするようにと直命された。一体どこからクーデターなどという不穏な噂が出たのか。検証を進めるに従って俺を混乱に陥らせたのは、全く掴み所の無い話の連続だった。

軍ではなく大臣家の連名で皇帝を廃し、自分達で国を治めて行こうとしているとか、クーデターではなく革命が起きようとしているとか。果ては、皇太子殿下が暗殺者を使って、皇帝を亡き者にしようとしていると言った噂まであった。

全く事実がわからない。

結局、噂の域を出ず、心配をするような事ではないという報告をした。

だがしかし、皇太子殿下の噂に関しては皇帝の耳に入ったらしく、激しい審問が行われた。皇太子は事実無根だと言い張ったが、疑心暗鬼になった皇帝は周囲の反対の声も押し切って、処刑の勅命を下し、皇太子は牢に繋がれた。

その一報を聞いたアレクサンドロ王子は、周りの人間が見ていられないぐらいの哀しみ様だった。

元々兄弟仲が良く、皇太子はアレクサンドロ王子を良く可愛がり、王子は皇太子を慕っていた。

そんな王子が、兄の皇太子が処刑されるという一報を受けたのだ。王子の哀しみようは酷く、周りの人間を寄せ付けず、レイエス家の三男坊であるルーカスという女のような子供しか側にいられないよ

うな状態だった。

俺は、そんな王子の様子を伺ってこいと言われて登城し、女官に王子のいらっしやるという場所を聞き、王宮の庭に赴いた。その時、子供特有の声が聞こえた。

「兄様、明日処刑かー。意外にあっさり決着ついたよねー。」

「お前の父親は馬鹿なのか？愚かなのか？」

「どっちもー！更に言えば阿呆ー！」

思わず俺は耳を疑った。この声は…。

きやらきやらと笑い声が聞こえたそこにいたのは、アレクサンドロ王子とレイエス家の子供：

そして、王子より小さい長い黒髪の子供…。そこまで見ていた時に、その黒髪の子供が俺に気付いた。

こちらを見ていたのは、珍しい深紅の瞳。

「…アレックス、知らない人間がこっちを見てる。」

「えー？誰？ここに入れる人間っていないはずなんだけどー。」

「他人がいるなんて鬱陶しい。アレックス、どうする？」

「うーん：あ、クリス。殺すのはちょっと待って。」

そこまで言われて、クリスと呼ばれた黒髪の子供から、間違えようのない静かな殺気が漂っていたのに気付いた。

何の感情も感じられない紅い瞳。表情は全くない。

幼いはずなのに、その無表情、無感情のせいで、やけに老成している感がある。

蛇に睨まれた蛙状態の俺は、その紅い目に見つめられ、冷や汗と身体の震えが止まらなかった。軍に所属していても、今まで感じたことが無かった死への恐怖だった。

「ねえ、君誰？その格好見る限り軍人なのはわかるんだけど、名前は何？」

王子に問いかけられるが、恐怖から口を開くことが出来ない。それに気付いたルーカス様は、クリスという俺を殺気で捕らえている子供に近づいて、話しかけた。

「クリス、殺気を解け。話出来ないだろ。」

「そうそう。話聞いたら殺させてあげるから、少しだけ待ってね、クリス。」

「わかった。」

そう言うと、俺を拘束していた殺気が解かれた。その瞬間、俺は膝を着いて荒い呼吸を繰り返し、汗を滝のように流していた。何なんだ一体…。そう思うが、思考が身体と付いていかず、気が付くと目の前にアレクサンドロ王子が立っていた。

「ねえ、名前は？って聞いてるんだけどー。」

「ら…ラインハルトと申します…王子…。」

「ラインハルト、何？」

「え？」

「だからー、ファミリーネームだよ。下の名前！」

「あ…ミカエリスです…ラインハルト・ミカエリス。」

しまった、と思った時にはもう遅かった。いつもは偽名を使っているのに、口が滑った。

「ふうん。ね、ルーカス知ってる？」

そこでルーカスと呼ばれたレイエス家のお子を見やると、椅子に優雅に腰掛けていた彼は、黒髪の子を膝に抱え頭を撫でながら、美しい顔をほころばしていた。

「ミカエリス將軍家の長男だろう。知ってる。だが、軍に入隊していたのは知らなかった。確か、先代の事件で没落寸前だと言う話だ

な。せっかく指折りの軍人揃いの一族だったのに、あの事件で一氣に失脚だ。ま、仕方ないがな。」

「へーえ。ミカエリス將軍か。聞いたことあるかも……。うーん……確かアルナージ村事件だね？ねえ？ラインハルト？」

ぎりっと齒軋りをして目の前の人物を睨み付けた。当の本人は、全く意にかえさない風だ。

「あれは……！父は止めたんだ！それなのに、あのクソ野郎は父をたばかって軍法會議にかけたんだ！あの誇り高い父が、虐殺だなんてそんな事、するはずがない……！」

俺が入隊する2年前、將軍である父がアルナージ村における虐殺行為で、軍法會議にかけられた。

アルナージ村はルグレス帝国の左端にある人口100人にも満たない、小さな村だった。

だが今現在は存在しない。その村は滅んだから。

反乱軍の掃討作戦中だった父の部隊は、吹雪による悪天候の為道に迷った。その時、近くにあったのがアルナージ村だった。

地方とは言え、ミカエリス將軍の名は浸透していて、厚く迎えられたらしい。吹雪が止むまでの間、少しだけ世話になることになった。

だがそこで、父の部下だった男が問題を起こす。
村長の若い娘を数人で襲ったのだ。

それを知った村長と父は、すぐさま駆けつけたのだが時既に遅し。
彼女は無惨にも犯され、しかも首に紐を巻かれて息絶えていた。

悲惨な光景に村長の悲鳴が重なる。それを聞いて我に返った父は、
すぐさま彼等を捕らえようとした。しかし、多勢に無勢、逆に父が
拘束された。

彼等は村長を刃物で脅し、村人を村の中心に集めさせた。

そこで行われたのはまさに、地獄絵図の光景。

血に酔った若い兵は、笑い声を上げて村人を殺傷し、また違う若い
兵は女を暴行、また違う兵は家屋に押し入り金品を略奪していた。

長く続いた悲鳴が止み、それと同じく雪も止んだ。

それから数時間後、父は合流した部隊に発見され、同時にアルナー
ジ村は消滅した。

ヴィネガントに戻った父は、それから暫くして逮捕された。父の罪
状は『虐殺行為及び、略取婦女暴行、それを煽動容認した罪』だっ
た。

全くの濡れ衣であった。だが証言をしたのは、当時父の部下だった
男。

将軍である父に逆らえず、虐殺行為を行ったと。

疑われぬように、他の部隊が来る前に、自分を拘束するように命令
されたとも証言した。

結局反論は全く受け入れられず、結局父は軍から追放され、虐殺行為の罪で処刑された。

それから、帝国におけるミカエリス將軍家の名前は地に墜ちた。

俺の母は、心労から身体を病み、幼い俺や妹達を残し亡くなった。

子供だけではどうすることも出来ないため、遠縁の親類に引き取られたが、そこでは殴られ蹴られ邪険にされた。

俺はまだいい。妹達に手を出されるような事はあってはならないと、必死に庇うと、更に酷い折檻が待っていた。

痛みと餓えに耐える毎日。ある日、空腹で目が覚めた。すると、隣で寝ているはずの妹達がいなかった。嫌な予感がして、急いで起きて探しに出かけた。結局朝になっても見つからず、呆然としているところに、俺達を引き取った叔父が現れた。

「お前はもう出て行け。」

「待ってください！俺はいいです。でも妹達は…」

「ああ、あの子達は娼館に売り払った。年も若いし、顔も悪くなかったしな。結構高値で売れたぞ。」

下品な笑い声を響かせながら、男は俺を屋敷から追い出した。

追い出された俺は、妹達を必死になって探した。見つけ出した妹は、既に店に出され客を取らされていた。なんとか連れ出そうとして、店の大人に見つかり、その都度殴られた。

結局、妹のうちの一人はそのまま病気にかかり死んだ。幸いな事に、もう一人の妹は父の無実を信じていた田舎の商家に引き取られた。俺も一緒に来ないかと言われたが、父の無実を晴らしたいと軍に入る事を理由に断った。

入隊するということは、軍から追放された父が持つミカエリスの名前は使えない。そのために名前を変えた。両親から貰った名前を捨てるのは忍びなかったが、俺には父の無実を証明するという目的がある。その事を母の墓前に報告し、そのまま軍の門をくぐった。

嫌な命令にも背かず、チャンスがあればモノにする。そうして、虎視眈々と出世していく中で、俺は父を処刑に追いやった男を見つけ出した。

その男は軍から除隊される事もなく、あろう事か俺の上官になった准将だった。何故事件に関わったこの男が准将にまで昇進したのか。探ってみると、この男の後ろには元帥がいるらしい。

そういえば、父と元帥は仲が良くなかった。当時のその元帥は、皇帝に取り入ってその地位を得たと陰では言われていた。それを良しとしなかった父は、声高に批判していなかったか…。

点だった疑問が全て一本の線で繋がれた。

父は元帥に嵌められたのだ。そのために、准将を使って父を陥れた。おとし俺の復讐心は煮えたぎっていたが、所詮は少佐、まだまだ立場は弱い。鬱々とした日々を送っているときに、俺はアレクサンドロ王子に出逢い、全てを話していた。

「へーえ…あの元帥がねえ。まあ確かに、あのオジさんは元帥の割に軍の事知らなすぎるよね。あれじゃあ有事の時、いち早く逃げ出

「しちゃうよねー。」

「ミカエリス將軍は敵が多かったはずではないのに、あっさりと処刑された理由はそれか。確かその准将は元帥の甥ではなかったか。」

俺の知らなかった情報までサラリと言った子供を凝視する。そういえば、レイエス家の中で神童と呼ばれている子がいなかったか。まさか、この子がそうなのか。

「ふーん…。ねえ、ラインハルト。そいつらに復讐したい？」

「勿論！！あいつらは俺達家族とミカエリス將軍家の名前を汚した！！決して赦しはしない！！」

俺の慟哭。そう、赦しはしない。それだけで生きてきた。どんなに殴られても、どんなに辛くても、俺にあるのはあいつらへの復讐心。あいつらを俺のこの手で殺してやる。

「じゃあ、僕らの言うことよく聞いて。君に復讐の機会をあげる。」

皆に天使と称されるアレクサンドロ王子の笑顔は何故か、背筋が凍る悪魔のような気味の悪い笑みだった。

それから暫くして、軍事クーデターが発生した。

俺が調べた時はそんな気配も微塵も無かったのに、統制の取れた軍内部の行動は決して短い間で組まれたものではなかった。明らかに、隠されていた今回のクーデター。

先頭に立ったのは事もあるうに、今や第一継承者となったアレクサンドロ王子。隣には、ルーカス様とクリスと呼ばれていた子供。俺は、クーデターが起きた際、この三人の護衛を務めていた。といっても、ほぼ役目らしい役目はなかった。呆気ないほど簡単にクーデターが成功したのである。

「さあってー。父上は投獄したしー、残りの小うるさい人達も皆死んだしー。これから、ルーカスとクリスは忙しくなるねえ。」

「？王子…いや、皇帝陛下。どういう意味でございますか？」

「んー？それは内緒。あ、ラインハルト、君の復讐だけど、もう少し待ってくれる？これで一気に片が付くからねー。」

ニコニコと笑う陛下の顔をただ見ていると、ルーカス様とクリスが、宰相と元帥、それに下官を何人か連れて部屋の中に入ってきた。

「陛下、この度はお喜び申し上げます。」

「我ら軍としても、この様な形であの愚王を玉座から降ろすことになりました事、誠に遺憾ではありますが、新しいアレクサンドロ皇帝陛下に置かれましては…」

「ああ、そんな思ってもいない口上いらなから。それより、君ら二人を宰相と元帥から罷免する。」

俺は驚き、思わず陛下を振り返って見た。陛下はというと、別に悪びれることもなく平然としていた。罷免された面々を見てみると、明らかに顔色が変わっている。

「何を仰います、陛下…。我らを罷免して、新たに誰を宰相と元帥に任命すると？」

「宰相はルーカス、元帥はクリス。これは決定。異論は許さない。さて、クリス、この二人を牢に入れてきて。あ、ラインハルトも一緒に行って。」

「わかりました。」

クリスはそれだけ言い、素早く宰相と元帥の動きを封じ、牢へと繋がる地下道へと歩を進めていた。

「クソガキ！ 離せ、このっ！」

「アレクサンドロは何のつもりなんだ！ わし等を罷免なんぞして、このガキが元帥！？ ふざけるな！」

聞くに耐えない罵詈雑言がクリスに浴びせられているが、それを庇うほど俺にも余裕が無かった。目の前には、憎き俺の敵。剣を握る手に力が入る。

このまま…。

その時、赤い瞳が俺を見た。

「ラインハルト、待て。まだ早い。」

「どういう意味だ。まだ早いって何だ！」

「お前の気持ちは知ってる。だからもう少し待てと言っている。陛下もそう申していただろう。」

「煩い、黙れ！！」

そう言って、俺は元帥に切りかかった。

はずだった。だが刃の切っ先はおろか、剣は柄から抜かれることすらなかった。

クリスが、俺の喉元に素早く一撃を浴びせ呼吸を奪い、そのまま俺の剣を奪っていた。

激しく咽せ、呼吸をしようと喘いでいると、元帥は俺の正体に気付いた。

「お前……ミカエリスの倅か。^{せがれ}死んだと思っていたが、まさか軍にいたとは。しかも少佐！ははっ！お前の父親は嘆くであろうなあ！！」

その言葉に驚いたのは、宰相もだった。

「ミカエリス將軍の？子供達は既に死んだと報告を受けていたぞ。それがなぜここにいる？」

……どういう事だ？すぐ下の妹は死んだが、もう一人の妹は生きているし、俺も死んではない。誰が報告をしたんだ？
そう考えていると、クリスが口を開いた。

「ミカエリス將軍に関することは、アルナージ村事件の件も含めて既に陛下が検証済みだ。それから、ミカエリス將軍家の子供達が全て死んだと報告したのは、私の手の者だ。」

「なんだと!?!」

「そんなバカな!!あの事件に関することは、既に全て抹消されたはず!それを一体どうやって検証したと言うんだ!!お前いい加減な事を言うな!!」

そう。記録は全て抹消されていた。俺が調べようと思ったのに、裁判記録はおろか、当時関わった人物全てがあのか裁判が終わった直後に不審な死を遂げて、誰にも話を聞くことも出来なかった。

ただ一人残ったのは、証言をした男だけ。それでは調べる事も出来ずに、ただ歯がゆい思いを抱えていたのが現実だった。

「レイエスが全ての裁判記録と証言、及び事件前後のミカエリス將軍の行動全部を含めて、総合的に判断した。裁判記録は見つけたぞ。と言っても、レイエスでなければ判別出来ないほどの念の込めようだったがな。」

「なんだと: : つ。」

「愚かにも程がある、宰相。いや、元宰相か。自分の屋敷に裁判記録を隠すとは。」

「なっ: : !?!何故それを知っている!?!」

感情が全く感じられない赤い瞳を見ながら、俺はそのやり取りを黙って見ていた。

まさかとは思ったが、宰相も絡んでいたとは……。父はこいつらに太刀打ち出来るわけがなかったのだ。最初から父を陥れようとしていたのだから。

元帥、宰相が話した内容は俺を混乱の極地へと陥らせた。

父は宰相の娘が、皇太子へと嫁がせる事への反対をしていた。既にナバレル皇帝は政務を放棄して長く、宰相が権力を掌握していた当時、ますます宰相の力が強くなることを案じた為だ。

それを忌々しく思った宰相は、元帥と画策し、あの事件を起こさせ父を失脚させた。

それが全ての真相だった。

「お前達は処刑される。処刑日は明後日。公開だ。」

ではな。と言い残し、長い黒髪を翻したクリスは、俺を伴い、そのまま牢を出て行った。

呆然とクリスの後について行った俺は、執務室へ向かう長い廊下の途中で崩れ落ちた。

父が処刑され、母が死に、妹までも死んだ時にも流されなかった涙が、堰を切ったように溢れてきた。

それをクリスはただ黙って見ていた。

大分経って俺が落ち着くと、側にはクリスが座ってこちらを見ていた。

「もう平気か。」

「ああ、大丈夫だ。悪い、陛下の所に行くのが遅くなるな。俺を置いて先に行っても良かったんだが。」

少々バツの悪い思いをして、目の前の子供を見た。不思議な子供だと思う。

俺より小さな、陛下よりも小さい人形のような整った顔をしている子供が、俺の行動を縛する程の殺気を放ったばかりか、呼吸を奪う一撃を入れたのだ。どう考えても、普通の子供ではない。そういえば、クリスの事は名前しか知らない事に今更ながら気付いた。

「そういえば、お前名前なんて言うんだ？今まで陛下やルーカス様の呼び方を聞いて、俺もそのまま使っていたが、ちゃんと名前聞いておかないとな。」

無表情なまま首を傾げたクリスの、長い黒髪が顔にかかった。それを指で払ってやる。嫌がる素振りを見せずに、黙ってされるがままだ。調子に乗ってそのまま髪を梳き、頭を撫でた。見た目通り、サラサラで絹糸のような艶やかさだ。

「クリステイン。クリステイン・マサイアス。」

思わず手が止まった。

迫憶（後書き）

長くなったので、分けます。

落日（前書き）

引き続きラインハルト視点です。

落日

クリスの頭に手を置いたまま固まった俺を見て、目の前の子供は更に首を傾げた。固まった当の俺は、クリスに言われた言葉を、必死に頭で理解しようとしていた。

マサイアス家。

皇帝の狗いぬと言われている暗殺一家。

決して表舞台には出て来ない闇の一族。

彼らを使役出来るのは、歴代皇帝のみだったはず。

マサイアス家は、軍や官僚の中でも、上層部にいないと知ることが出来ない、秘中の秘。將軍であった父親から少しだけ聞いたことのある俺にとっては、完全に寝物語のようなものだった。

それなのに、まさか、俺の目の前にいるクリスがおとぎ話の中だけだと思っていたマサイアス家の子供だなんて、混乱しないほうがいい。

「ラインハルト？」

クリスに名前を呼ばれて、我に返る。無表情なまま、俺を見ていたクリスはその刹那、勢いよく後ろを振り返った。

「伏せろ。」

「は？」

「早く伏せろ。」

言われたまま急いで伏せると、俺の頭上を何かが通り過ぎた。一体何事だと後ろを振り返ると、壁に短剣が何本も刺さっていた。状況が飲み込めずクリスを見ると、クリスは双剣を手に、二人の男と刃を交えていた。

「やはり生まれた時に殺して置くべきだったな。クリステイナー。」

「父上、俺に殺^{やら}せてください。皇帝を裏切ったばかりか、よりにもよって、クリステイナーは曾祖父様の双剣を持ち出した。万死に値します。」

「わかった。だが、ここではダメだ。屋敷に連れて行くぞ。」

「はい。」

クリステイナーって誰だ？クリステインじゃないのか？
クリスと見知らぬ壮年の男と若い男の二人の男が繰り広げている、

まるで剣舞のような攻防をただ呆然と眺めていると、クリスの鳩尾に峰が入った。

ぐったりと倒れ込んだクリスは、双剣をその小さな手から落とし、年若い男に担がれ、連れ去られた。

落とした双剣は、もう一人の男が如何にも大切そうに拾い上げた。男は、クリスから取り上げた鞘にキンツという金属音をさせ、双剣を鞘に納めてから、俺に一瞥をくれた後、姿を消した。

今までの喧噪が嘘だったかのように、辺りは静寂が戻っていた。

我に返った俺は急いで陛下とルーカス様がいる執務室へ、クリスが何者かに連れ去られた事を報告しに行った。

「陛下！クリスが何者かに連れ去られました！」

「へーえ。そうなの？」

「早く探しに行かないと！あれじゃあクリスは殺されます！」

「だあいじょうぶだよ。クリスだもん。」

俺の目の前でクリスが拉致されたのに、いつもはクリスを離さない陛下は至って平然としていた。

ルーカス様は優雅にお茶を飲みながら、書類らしき物に目を通していた。

「多分、夕方には戻ってくるんじゃない？ところでさあ、今日の夕食何だろうなー。ねえラインハルト、僕お腹空いちゃったからさ、メイドにおやつ持って来てって言ってくれない？」

「アレックス、今から間食すると、夕食食べられなくなるぞ。」

「だってお腹空いたんだもん。おやつ食べたーい！」

「お二人とも、何を言っているんですか！クリスを連れ去ったのが何者かもわからないのに、そんな悠長な！」

そこまで言って、目の前の陛下の顔が変わった。

口元は笑っているのに、紫の眼が全く笑っていない。

ルーカス様もお茶のカップを口から放し、書類からも目を上げて、冴え冴えとした視線を俺に寄越していた。

「連れ去ったのは、マサイアスの人間だよ。クリスの父君と兄君だね。多分、クリスはマサイアスの屋敷にいると思うよ。」

あれが…？

闇の一族の現当主と次期当主の剣を、クリスはその曾祖父の物だった言う双剣で受け止めていた。もしかしたらクリスは、彼らより強いのではないのか？

「クリスは戻ってくる。アレックスのものだからな。そうだろう？」

「当たり前だよ。」

そう言って、目の前の美しい二人は悠然と微笑んだ。

信じられない気持ちで陛下達を見ていると、陛下はお腹空いたーと言って部屋の外に出て行かれた。

残ったルーカス様は、再び、優雅にお茶を飲みながら突っ立っていた俺に静かに話かけた。

「どうした？」

「え…いや…お二方とも何でクリスが居なくなったのに、そんなに落ち着いていらっしゃる…」

「これで死ぬ位なら、初めからアレックスはクリスを手に入れてない。死んだら、所詮それまでの器だったと言うことだろう。」

「…………。」

あんなに大事そうにクリスを抱えていたルーカス様ですら、クリスに対して非情なまでの突き放し方だった。

もはや、この二人には任せておけないと思い、何か手がかりはないかと部屋を出て行こうとした時、背中から冷ややかな声がかかった。

「どこへ行く？」

「お二方には任せておれません！俺が探しに！！」

「どうやって？」

「どうやってって、まず、マサイアス家の屋敷を探して…」

「だから、どうやって？」

はっと気が付く。

マサイアス家は闇の一族。

当然どこに屋敷があるのかなぞ、誰も知らない。

「で…でもっ！！」

「でも？」

ルーカス様が椅子から立ち上がり、ゆっくりと俺に近付いてきた。逆行を浴びているので、顔が見えない。

だが、俺を畏縮させるほどの怒気に、俺は何も言えなくなっていた。

「屋敷を見つけ出したとしても、マサイアス家は皇帝の狗だ。お前が、おいそれと屋敷に侵入なんて出来ないぞ。仮に、マサイアスの敷地内に侵入出来たとしても、屋敷の中に入る前に、間違いなく首が飛ぶ。」

「ふっふっん！あそこに入れるのは、儂らだけだからのう。」

俺でも、ルーカス様でも陛下でもない声が、俺達に割って入った。虚を突かれて、^{しわが}嘎れた声が見ると、真白い髪の老人が立っていた。

一体何処から現れたのか、わからない俺と、その人物を知っているようなルーカス様は揃って、その老人を視線で追った。だか、老人は俺達じゃない誰かを探しているようで、おや？と素っ頓狂な反応をしていた。

「坊やおらんのか？ここにいると思ったんだが…。こら、お嬢ちゃん、坊やは何処ぞ？」

「…誰がお嬢ちゃんだ。全く…なんで卿がここにいる。」

「おやおや、とんだご挨拶だのう。せっかく、儂の可愛い孫が浚われたと言うから来てみたら、とんだご挨拶だわい。で？坊やはどこだね。」

「ここにいるよー。」

後ろから、陛下の明るい声がした。慌てて陛下の方を見ると、お菓子が乗ったカートを押して、悪戯が見つかった時のような顔をしていらした。

「変わってないね、貴方は。やっぱり来たんだ、貴方が来るんじゃないかなと思ってはいたんだけど。あ、お茶にする？」

「おや、いいのかね。では少しだけ頂こうか。ああ、坊や。皇帝になられたようで、遅ればせながらお祝いを申し上げる。マサイアス家から、儂が変わって祝辞を述べさせてもらうぞ。」

「うーん、祝辞はクリスマスからもらったからいいんだけどなあ。」

ルーカス様が白髪のお茶を入れて、お前もどうだと言われたが目の中の光景にいっぱいだった俺は、手を振ってそれを固辞した。

それから、三人は親しげに雑談を始めていた。

またもう一人、マサイアス家の人間が…。

老人なのだが、全く一分の隙もない。

両手に黒い手袋をはめ、身の丈の半分程の長剣を脇に置いている。

まさか…。いや、あの人は行方不明だったはずだ…。

しかし話を聞いていると、どうにも目の前の人物が、俺が父親から聞いたことのあったマサイアス家の人間にしか当てはまらなかった。半ば愕然としたままそのおとぎ話の人物の名前を呟く。

「…クリストファー・マサイアス…」

黒い瞳が俺を映した。

彼が、ふっと口角を上げる、それで、その名前が彼の名だというのがわかった。

クリストファー・マサイアス。

マサイアス家最強の伝説。先々代皇帝の狗として、圧倒的な力と智謀で皇帝を裏から支えたという。

帝国の暗部に絡んだその名は、軍の中でもまことしやかに囁かれていた。

確か、先々代皇帝の時代は他国の侵略があったはずだ。

だが、その国は今や存在しない。

父親の話では、このクリストファー・マサイアスが暗躍していたと言われている。

「あ、あの…。」

「おやおや、ミカエリスの小倅か。お前の父も残念だったな。」

驚いて目を見張る。

「一度だけ、おぬしの祖父に会ったことがある。おぬしは祖父によ
う似ておるわな。腕の方はまだまだ小童だかのう。」

「祖父に…ですか。」

「ちょうどおぬしが生まれた時であつたか。弛んだ顔で、陛下にデ
レデレと孫が生まれたと報告しておつたわ。」

俺に見つめられながら、クリストファー殿は楽しそうに回想をして
いるようだった。

俺の祖父…。正直、物凄く厳格だった記憶しかない。遊んでもらっ
たこともなく、言葉をかけてもらっても、怖くて俺は逃げていたよ
うに思える。

「祖父が…。家ではそんな素振りを見せた事がありませんでしたが
…。」

「その分、王宮でのろけていたのであろうな。有名であつたのだぞ、
ミカエリス將軍はじじ馬鹿だと。」

「へーえ。翁の時代はそんな楽しそうだったんだあ。」

「飼い主が良かったからの。坊やはどんな飼い主になるかのう？」

「はははっ！あのさ、翁。誰に対して言ってるの？」

椅子に深く座り、くすくすと無邪気に笑った陛下は、やはり天使ではなく、悪魔のような邪悪さが垣間見える。

一体俺達は何をしでかしたのであろうか。

もしかしたら、ナバレル皇帝より恐ろしい魔物を引っ張り出したのではないのか…。

「さて坊や、そろそろ儂は行くぞ。クリスティーナはすぐに戻ってくるからのう。ただ、泣いておるやもしれぬが。」

「クリスティーナは泣けるのか？」

「僕も見ることないけど。」

「ふふふ、笑った事もないはずよ。儂がそう育てたからの。さあて、少しばかりイタズラが過ぎた皇帝にに会うて来るかのう。ではな、坊やにお嬢ちゃん。ああ、小倅もな。」

開かれた窓から出て行ったクリストファー殿は、現れた時と同様に音もなく姿を消した。

その場に残された俺達を照らしていたのは、部屋中を染めあげる紅い夕日だった。

「大丈夫。私は疲れていないぞ。」

「ご自分の体調管理も仕事ですよ、閣下。」

絶対に眠いはずなのに、がんとして休もうとしない閣下を見て、大仰にため息を付いた。全くこの人は昔から変わっていない。自分の事に無頓着すぎる。

その後、クリスは陛下の言った通り、夕食前に戻っていた。

虚ろな目をしたクリスは、全身血まみれだった。

そして、クリスが浚われる前に俺が撫でたはずの長い美しい髪が、ぱっさりと肩口辺りまで切られていた。

それに激昂したのが陛下だった。皇帝勅命でマサイアスの一家処分を決定した。

と言ってもクリスが戻ってくる際に、現当主の父親と、時期当主の兄を殺していたし、それに直接関われるのは、やはりクリスしかなかった。

ただ淡々と仕事をしていく無感情なクリスを見ていて、胸が詰まった。

この子は、無感情なんじゃない。どうやって、感情を表したらいいかわからないだけなのじゃないのか？

多分、あの父親と兄の態度からして、愛されていたとは思えない。マサイアスの名を背負う者には愛なんて必要ないのかもしれない。でも、誰かあの子を愛してあげないといけないんじゃないのか。

俺が守って、愛してあげたい。

そう俺の心の中に芽生えた瞬間だった。

クリスの短くなった髪を見てルーカス様も苛立ったご様子で、はけ口に、処刑前の前宰相を理路整然と、知識の深さ等で完璧に打ち負かした。

俺の仇だった前元帥と、俺の偽証をした男は、軍の連中になぶり殺された。

ミカエリス家の名は名誉回復し、俺は今、ミカエリスを名乗っている。そして軍の中でも昇格して、ミカエリス將軍の名前を継いだ。母と妹の墓前に、そう報告した。きっと二人も喜んでいることだろう。

將軍である、俺が守るべきは皇帝である陛下だ。

だが、俺は彼女を守ってあげたい。

皇帝の狗と呼ばれるこの子を。

「駄目です。今日は休んでください。これは、陛下のご命令です。」

無表情なこの子が、少しだけ不機嫌になるのがわかったが、気にせず背中を押して部屋に通す。

以前切られた髪は、今や切られる以前の長さに戻っている。

美しい絹の髪。

部屋に入る瞬間、スルリと俺の手の中を滑った黒髪。

彼女を手に入れたい。

だが、陛下と宰相閣下が黙ってはいないだろう。
彼らもクリスに執着しているから。

だから、俺はこの距離で満足だ。

君の背中を守るのは俺だ。

マサイアス家討伐―前編―（前書き）

残酷な表現がありますので、苦手な方はご注意ください。

マサイアス家討伐―前編―

「ミカエリス將軍、マサイアス閣下はいずこにいらっしゃいますか？」

「閣下は今お休みになられた。どうした、そろそろと。なにか急用か。」

「あ、そうですか。いや、急用ではないです。ただ、閣下のお顔を拝見したい…なあ…と思っ…いや！ すいません！！ 嘘です！！ 冗談です！！ ごめんなさい！！」

「お前ら…それでもルグレスの精鋭部隊か…。」

そこにいたのは、ルグレス帝国が誇る精鋭部隊隊長4人。

マサイアス家討伐で生き残った数少ない生存者だ。

4人が4人ともマサイアス閣下に信賴以上の何かを持っているが、皇帝陛下と宰相閣下が怖くて。それ以上に、マサイアス閣下に嫌われるのが何よりも怖いのである。

辺りを漂う死臭。

滴り落ちる血の音。

一面を染めたのは血と、肉。

その凄惨たる光景を作り出したのは、年端もいかない子供。

俺達はその光景が信じられず、ただ立ち竦むしかなかった。

俺の名前はヴィクトール・ランカスター。ルグレス帝国軍の一部隊長だ。

だが、最近起こったクーデターで俺達、軍を統べるトップ：元帥閣下がたった10歳のガキに成り変わった。皇帝陛下は13歳、宰相までが15歳。一体この国はどうなるんだろうな。そうのん気に思っていた。

だが状況は一変する。

陛下が、マサイアス家の討伐命令を勅命で出されたからだ。

俺は、そのマサイアス家っていうのがどういう事をしたとかは知らない。だが、上層部のお偉いさん方の顔色はみるみるうちに青ざめていく。軍の准将や將軍クラスの軍人ですら必死になって陛下に懇願している。

「陛下！お止めください！！マサイアス家に討伐命令をお出しになるなど、単に兵の命を散らすだけです！！どうかお考え直し下さい！！！！！！」

「陛下！！お考え直しを！！」

あまりに必死の懇願に、俺達下っ端の兵にもさすがに状況が飲みこめてきた。

どうやらその『マサイアス家』っていう一族は、ヤバイらしい。聞く所によると、歴代皇帝お抱えの暗殺一家だという事だ。そんな危ない一族が一体何したんだ？

俺達の疑問や、必死に懇願している幕僚に一切答える事無く、集まった兵を一瞥した陛下の顔には、清しいまでの笑顔が浮かんでいた。

「君達、皇帝たる僕の命令に従えないの？」

笑顔の裏に隠された魔王の言葉。

その言葉に、啞然として何も言う事が出来なくなった俺達を見て陛下は、後ろに控えていた宰相閣下に後を託して、お下がりになられた。

「これからお前達は、マサイアス家の屋敷に侵入し、それから、マサイアスの人間を一人残らず殺してこい。容赦はするな。女、子供、老人、手加減なんてすると死ぬのは自分だぞ。死にたくなければ、躊躇せず殺せ。」

女のような顔をした宰相がサラリと口にしたのは、あまりに驚くべき内容で、周囲の人間は俺も含めて、皆ぽかんと口を開けている。

我に返ったのはさすがに、幕僚クラスの人間が早かった。猛然と宰相閣下に抗議をし始めたのである。

「我らは捨て駒なのか!!」

「私達の命を何だと思ってるんだ!!」

怒声が広場を包む中、宰相閣下の後ろから小さな人影が現れた。その小さな子供が徐に口を開く。

「貴様らは最初から殺されに行くつもりなのか。」

子供特有の高い声で問いかけられたことで、混乱の最中にあった広場を静寂へと導いた。

「これが我がルグレス帝国の軍だとは、甚だ遺憾だ。」

「ちなみに、今回のマサイアス家討伐には、クリスティン・マサイアス元帥が指揮を取る。遅れを取るなよ。」

啞然としたのは、俺達だけではない。

高官連中も言葉を失っている。

マサイアス家を討伐するために、マサイアスの人間が行くのか？ しかも、こいつが元帥？

どっからどう見てもガキじゃねえか。

耳が隠れる程度の黒い髪に、ちっせえ身体。なんでこいつが元帥なんだ？

「マサイアス家の屋敷はここからそう離れてはいない。気を抜いたら、殺されるぞ。わかったか。」

そう、ガキが言っても誰も従おうとしない。俺だってそうだ。

誰も付いて行こうとしないのを見て、宰相は一言。

「陛下の言葉を忘れたのか。これはルグレス帝国皇帝陛下の勅命で行われる討伐だ。おとなしく元帥の言葉に従え。」

鬱蒼^{うっそう}と茂った森の中を進む。

周りの皆の顔は一樣に厳しい。元帥の傍には、ラインハルト少佐と、少数の護衛らしいのが付いている。

自分は護衛付きかよ……。そう思っていた時に、前方から荒々しい声が聞こえた。

「やっぱりおかしいだろう！！なんでこんなガキが元帥なんだ？！

なあ、お前だって思うだろ!!」

「ああ、そうだとも!!」

「そうだ、そうだ!!」

声が静かな森を俄かに騒がせ始めた。

元帥のガキは一切表情を変えない。それどころか、こいつは俺達の前に姿を見せてから一度も表情を変えない。無表情のままだ。

「おい、すかしてねえで何とか言えよ。お前、元帥なんだろ? そんなちいせえナリで笑わせてくれるよなあ!」

胸倉を捕まれて、元帥のその軽い身体が宙に浮いた。だが、少佐や護衛が動く気配がない。

苦しさも、冷ややかさも、全く無い目で胸倉を掴んでいる男を一瞥したガキが、手を上げた。

瞬間、男の首から血が吹き出した。

一体何が起きたのかわからないのが大半。それから一拍遅れて、悲鳴が起こった。

血を吹き出した男の手の力が緩むと、宙に浮いていた身体がふわりと地面を踏んだ。

「下衆が。」

男は絶命していた。

「反抗する者は他にいるか。マサイアス家に着いてから死ぬか、今ここで私の手に掛かって死ぬか。早いか、遅いかの違いだ。」

「…閣下。」

少佐が眉を顰めて、辺りをぐるりと見回した。

「ああ、気付いてる。こんな事をしている場合ではない。来たぞ、死ぬなよ、お前達。」

ガキがそう言うや否や、そこから俺達に対して怒涛の攻撃が始まった。

誰がどこから狙っているのかわからないまま、ただ闇雲に逃げて攻撃の手をすり抜る。周りの仲間がどんどん死んでいっている。

大佐以上の奴らですらそれは例外ではなかった。

「はあはあっ…どこから狙ってきてやがる…。」

ガサリと草わらから音がして、急いで持っていた剣を構えた。

「待て！俺は味方だ…って、ヴィクトール…生きてたか！」

「ザック…！お前も無事だったか！」

そこにいたのは、ザック・ガエルニクス。俺と同期入隊の別の部隊長だ。こいつも必死になって逃げてきたんだろう、よく見ると、軍服は土まみれで、顔には幾筋もの血がついている。

「おい…一体これは何なんだ…。なんで俺達が狙われてるんだ…。」

「わからん。わかってるのは、死にたくなかったらこの森から出なきゃいけないって事だけだ。お前、出口を見つけたか？」

「いや…。元帥達ともはぐれちまったしな…。あのガキ…陛下も宰相も一体何考えてるんだ。他の奴らどうしただろうな。」

「そういえば、ザックの部隊はどうなった。」

「全員死んだ。ヴィクトールんところは？」

「…お前んとこと同じだ…。」

出口を求めて、二人で歩き始めて周りを見渡す余裕が出来た。改めて周囲を見ると、見知った顔や、お偉方がそこに死に顔を

晒している。不憫に思ったが、弔ってやることも出来ないまま、ただ安らかに天に召される事を祈った。

歩いているうちに、生き残っている奴らと合流した。最終的には、最初にいた人数の半分位の人数が俺達と行動を共にし、出口を探す。

「おい、あれ出口じゃないか？」

誰かがそう声を上げると、どこからともなく歓声が上がる。

我先に出口へと殺到すると連中を呆然と見ていると、俺達の周りに殺気を感じてザツクの脇をこずいた。

「…ザツク…気付いてるか…。」

「…ああ。」

「すみません、ランカスター隊長、ガエルニクス隊長…ですよね。この纏わりつく殺気…これ始末しないと、またさっきの二の舞になります。」

「お前は？」

「アイン小隊所属のゲイリー・ストーンです。」

ゲイリーと名乗ったそいつは、自分の部隊は既に全滅し生き残っていた別の部隊と行動していたが、出口付近の殺気を感じて、同じく

気づいている俺達に話しかけたと言った。

「この殺気…また来るぞ。」

後ろからかった声に振り返ると、そこには俺も知っている人物が立っていた。

ウェストン・ブリッグハウス。

ブリッグハウス將軍は先帝時代に、先帝の放蕩を諫めた。そのため將軍の地位を剥奪され、今は国境近くの辺境の地で国境警備をしていたはずだ。

戦略上手なだけではなく、人望厚く、徳高い將軍がお勞しい…と將軍職を罷免された当初は嘆かれたものだ。

「ブリッグハウス將軍…。まさか貴方までいらっしゃったとは…。」

「もう將軍ではない。その呼び名は最早私のものではないよ。集まってるのは俺だけではない。以前、活躍していた奴らがわんさか集まってるぞ。…しかし、まさかマサイアス家が討伐されるとは…。元帥はマサイアス家の人間だろう。一体何があったんだ。」

「すみません…聞いてもいいですか…。」

「何だ？」

「あの：マサイアス家って皇帝お抱えの暗殺一家なんですよね：？」

ザックの問いに、渋い顔をしたブリッグハウス将軍が、頷く。

「俺達も詳しい事は知らんが、マサイアス家はこの国の創生期から、皇帝に徒^{あた}なす敵を裏で一掃してきた。別名、皇帝の狗。有名なのは先々代皇帝の狗：クリストファー様だな。」

「それ：僕おとき話だとばかり思っていました：。」

ゲイリーの呟きに俺達は三者三様の反応だが、同意した。

クリストファー・マサイアス。

軍に所属する者だったら一度は耳にするその名前。

何でも、先々代の頃、一人で国を滅ぼしたと言われている。まさかそんな事出来るわけないと一笑に伏していたが、事実らしい。その時、前方から悲鳴が聞こえた。

「始まったか。お前達、名前は？」

「俺はヴィクトールです。こっちはザック。こいつはゲイリー。」

「俺の事はウエスでいい。殺氣の元を辿るぞ、いいか、気を抜くなよ。」

そう言って、ブリッグハウス將軍は剣を構えたので、俺達も気を引き締め、殺氣の根源を探り始めた。

殺氣を辿って森を進むと、まだ小さな子供がぽつんと倒木の根元に腰掛けていた。

黒い髪と黒い眼。年はまだ10歳前後と言ったところか。

何でこんな所に子供が？そう思って、その子に声をかけた。

「おい、お前どうしたんだ？こんな所で迷子にでもなったのか？」

首を振るばかりで一向に答えようとしないその子に困っていた時、いきなりその子供が攻撃してきた。

ナイフを持って、俺を斬りつけようとしている。しかし、所詮子供。体格差と経験の差がそれを凌駕した。

ナイフを取り上げ、急いでその子供の首根っこを掴みあげた。

「お前…っ！何でいきなり襲う…！」

「離せ！」

じたばたと暴れるその子をどうしようかと考え^{あぐ}倦ねていると、疲れ

たのか、急に大人しくなりはじめた。」

「お前、まさかマサイアス家の子供か？」

「…だったらどうした…。殺すんだったらさっさとしろよ。」

「お前なあ…。そんな小せえくせに殺すとか言うんじゃないよ。せっかく見逃してやろうとしてんのによ。」

その言葉に驚いたのか、子供は慌てたように俺と視線を合わせた。黒い眼が俺を凝視している。

「おっさん、バカ？」

「なっ！おっさんって何だ、おっさんって！！俺はまだ25だっ！しかも、バカって何だよ！！！」

「だって、森であんたの仲間を殺したのってオレだし。それなのに逃がすってお人好しなバカしかいないじゃん。」

やっぱりそうか。

薄々感付いてはいた。こいつが森で動いてたんだろうと言うことは。だが、あれはこいつの意志ではなく、大人に命令されたのだろうと言うことも何となくわかった。

「そりゃああれはやり過ぎだな。だけど、お前の意志じゃないんだろ？率先してやってたんなら、俺も許さねえけどな…。」

「…本当におっさんってお人好しだな…。」

「だから、おっさんじゃねえつつってんだろ！俺にはヴィクトールって名前があんだよ！ほら、お前も名前、教えろよ。」

「……ミハエル…。」

「そうか、ミハエルっつーのか。じゃあミハエル、早いところ逃げな。もうマサイアスの家に戻るんじゃないぞ。」

掴んでいた首もとを放してやる。
ぱたぱたと服を払って、俺を真っ直ぐに見たミハエルはにっこりと笑った。

「ありがとう、ヴィクトール。…やっぱりあんたお人好しだよ。」

そう言うや、ミハエルが再び鋭い刃物を持って俺に襲いかかってきた。

生憎距離が近すぎた。俺が剣を構える時間がなく、腕で防ごうと顔を背けて腕を上げた。

だが、その切っ先は俺に届く事は無かった。

再び目をミハエルに戻すと、ミハエルは剣で胸を木に張り付けられて、死んでいた。

口から一筋の血を流し、今まで黒い眼が覗いていた瞳は閉じられている。

胸に刺さった剣をよく見ると、装飾のされていない単なる普通の剣に見えたが、触るのが憚られるほど剣から禍々しい物が感じられる。せめてそれだけでも抜いてやりたいが、触れないほどの禍々しさだ。

「…ミハエル…。」

呆然とその名を呟いて、膝を付いた。
いつの間に現れたのか、隣には元帥が立っていて、しゃがみこんだ俺を上から見下ろしていた。

「子供でも殺せと言わなかったか？」

感情が無い口調と、その無表情な顔を見て、俺は思わず寒気がした。

マサイアス家討伐―中編―（前書き）

残酷な表現がありますので、ご注意ください

マサイアス家討伐―中編―

「あーあ…閣下に会いたかったなー。」

「いきなりなんだ。」

俺の隣にドカツと座った男をチラッと見た。

そいつは、俺と同じく、マサイアス家討伐の生き残り。あの討伐で生き残ったのは、最初の人数の1／10にも満たない。

その生き残りは、軍の上層部に組み込まれている。現に俺と隣に座った男も、元帥直属の精鋭部隊を率いている。

「ミカエリス將軍に追い返された。くそー、ミカエリス將軍め！自分が閣下の側付きだからってさ、独り占めはするいよな！そう思わない、ヴィクトール！？」

「…いや…て言うか、お前…後ろ…。」

「え？後ろがなに？」

「愉しそうな話をしているな、お前…。そういえば、帝都の清掃作業に人数が足りないと宰相閣下が仰っていた。お前、行ってこい。」

そこにいたのは、噂のミカエリス將軍。せっかくの男前な顔が歪んでる。

その覇気に蹴落とされたあいつは、青い顔をして転がるように王城

の門を出て行った。
ふと視線があったミカエリス将軍に、まあ座れば？と隣の空いた席を進めた。

「何で俺が、あいつにあんな事言われるんだ。」

「そりゃあ…ラインハ…いや、ミカエリス将軍が閣下になつたりだからでしょう。」

ムツとしたのか、眉間にシワを寄せた。

「今は敬称無しでいい。閣下になつたりって何だよ。俺は俺の任務を遂行してるだけだろう。」

「まあなあ。でも、元帥閣下から遠い奴らからしたら、お前はべつたり張り付いているように見えるんだよ。ま、宿命だと思って耐えろ。で、閣下は？」

「くそっ…。ああ、閣下はお休みになられた。最近忙しくてらっしやったからな。こんなに忙しかったのは、あの一件以来か…。」

「…そうだな。」

知らずに付いたため息がやけに大きく聞こえた。
あの一件。

つまりは、マサイアス家討伐の事である。

全てを見ているようで、何も見ていないその双眸。

血のように紅い瞳。

俺はその眼に捕らわれる。

「誰かと思ったらミハエルか。成長していると思ったら、肝心な所で無駄口を叩いて機会を不意にする。まるで昔と変わっていない。」

無慈悲に、そう新しい元帥は呟いて、ミハエルを木に縫いつけている剣を徐に引き抜いた。

次の瞬間、俺は思わず、地に落ちるミハエルの体を抱き止めていた。

小さな体を抱き寄せて、改めて思う。

——こいつらは普通じゃない——

命を助けようとしたのに、これを拒否して俺を襲ったミハエルも、そのミハエルをあっさり一撃で仕留めた元帥も。生者の命を奪うことに、躊躇いや罪悪感、拒否反応がまるで感じられない。

現に、俺を再び襲おうとしたミハエルは子供らしい笑顔を浮かべていたし、眼前の元帥はこの状況に眉をピクリともしない。確かこいつもマサイアスじゃなかったか？

だったら…

頭を過ぎった不穏な考えを急いで打ち消した。その時、頭上から声がかかった。

「いつまでそうしているつもりだ？」

「…お前…ミハエルと知り合いか…？」

後々、考えてみれば愚かな質問だったと思う。だが、この時はそれを言うのが精一杯だった。

俺の質問に、元帥は淡々と、無関心に、まるで取るに足らないモノかのように答えた。

弟だと。

「ヴィクトール！無事だった…か…どうしたんだ、その子供…。」

ザックが慌てて駆け寄って来たが、俺の腕に抱かれたミハエルを見て目を見張っている。よく見ると、側にゲイリー、ブリッグハウス将軍もいる。どうやら、森での殺戮は収まったらしい。

「ソレがこの森の狩り人だ。ここは、コレの遊び場兼狩り場だからな。余所者が足を踏み入れたら、躊躇なく排除せよと言われている。まあ、今回排除されたのは自分だったが。」

単調な口調で、事務的に話す元帥を見て、俺は何かがキレる様な音を頭の片隅で聞いた気がした。

気がつく俺は、元帥に掴みかかろうとしていた。しかし、それに素早く気付いたブリッグハウス将軍に羽交い締めになれ、どうにも出来ない身体をただ闇雲に動かし、目の前の小さな子供を睨み付けた。

「おま…お前！！この子はお前の弟なんだろう！？弟を自分で殺しておきながら、なんでそんな態度でいられるんだよ！？」

俺が抱いていたミハエルと同じくらいの小さな身体。その身体に宿っていた命を、こいつはいとも容易く奪った。

俺の剣幕に驚いていたザックが流石に慌てて諫めようとするが、俺は構わず元帥に怒鳴りつけていた。羽交い締めになっていたブリッグハウス将軍も力を入れ直し、それにゲイリーも加わって、俺は二人

掛かりで抑えつけられていた。

そんな状況なのに、この元帥は微動だにしない。ただ黙って、俺の罵声を受け止めているだけだ。

その体勢に益々苛立った俺は、思わず口走った。

「この人形が！」

その言葉に眼の色を変えたのが、側にいたラインハルトだった。静かに、だが、間違いなく苛立った声で俺の目の前まで来て凄んだ。

「貴様、今の言葉を取り消せ。」

「嫌だね。だいたいお前も、元帥のお守りか？野心家のラインハルト少佐も落ちたもんだな？」

「なんだと!？」

ガッと胸ぐらを掴まれたが、そこに冷静な声が割って入った。

「止せ、ミカエリス。」

「っ…失礼しました。閣下。」

元帥から止められたラインハルトだが、呼ばれた名前にみんな驚いた。

中でも一番驚いていたのは、ブリッグハウス将軍だ。

「…ミカエリス…？ミカエリスって…ラインハルト、お前…ミカエリス将軍家の…？」

「息子だ。」

息子…と呟くブリッグハウス将軍の力が弱まった。その隙について、元帥に掴みかかろうとした。

しかし、その瞬間、俺の喉元にミハエルに突き刺さっていた剣が突きつけられる。

俺を見ているその双眸は血のような——紅——

「言いたい事はそれだけか？」

「ぐっ…てめえ…！」

「弟と言っても、私はミハエルと一緒に育った事はない。ミハエルだけではない。私は一族から疎まれていたからな。第一、今から行くマサイアスの屋敷だとて、先日足を踏み入れたのみだ。」

「…え？」

「その時、父と兄を殺してきたが、今回はその敵討ちとばかりに私

を狙ってくるはずだ。それが隙になるとも知らずにな。」

「なんと…。」

そう呟いて絶句しているブリッグハウス將軍だが、俺は更に混乱していた。

こいつは、弟だけじゃなく、父と兄まで殺したのか。

「お前…それでも人の子か…？」

「それが？」

「それが…。何でそんなに無関心なんだよ…。」

理解出来ない、この子供の言葉がわからない。

「父と兄、弟を殺した。それがどうした。あれらは、マサイアスの人間だ。端から親子としての情はない。」

「だからって…」

「マサイアス家は皇帝の狗だ。私を育てたクリストファー様はよく言っていた。『マサイアスの名を持つ者には感情はいらぬ』と。ミハエルといい、兄といい、感情に左右され過ぎた。だから隙が出来る。皇帝の狗の名を背負うんだ、生半可な気持ちでは皇帝を支えきれない。」

「それで、貴方は感情が？」

ザックがぼそりと呟いた。

「私のこれは生まれつきだ。クリストファー様から『お前は秀逸だな』と御墨付きを得てるしな。」

「秀逸って…駄目だ。俺には理解できん。」

「理解されようとは思わないし、してほしいとも思っていない。私を理解しているのは陛下と宰相だけでいい。」

そう言って元帥は歩みを進めて、森の出口へと向かう。

呆然としている俺を一瞥したラインハルト少佐…いや、ミカエリス家の息子はそのまま元帥の後を追って消えた。

「…あの元帥はまさにマサイアス家の人間だな…。いや、皇帝の狗と言った方が正しいか。しかしまさか、こんな所でミカエリス家の息子と会うとはな。いやはや…来て良かったと言うべきか…。」

「え？ちょっと待って下さい、將軍。僕達はこのに有無をも言わさず連れて来られたんです。將軍は違うんですか？」

ゲイリーが俺達も引っかけた言葉を聞き返した。

その質問に、苦笑しながら歩きながら話すと言って、將軍の後に着いていった。

「將軍ではないんだ、ウエスで良いって言っただろう。俺や他の奴らは、強制的にこの討伐に参加したわけではない。そもそも、強制的に連れて来られた奴らは、前皇帝側に付いた軍幹部が率いていた部隊だろう。違うか？」

「：確かに：。俺達の上官はナバレル側に付いて、あの愚王に言われた通りに民を虐げて、自分達は甘い汁吸ってましたから：。」

「だろう。今回のマサイアス家討伐は、その腐敗した軍幹部を一掃する為に行われると俺達：辺境に飛ばされた元は帝都在留軍人の奴らの中で言われていたんだ。まあ、マサイアス家がアレクサンドロ皇帝の逆鱗に触れた事も起因しているらしいが。」

「そうなんですか：。」

「あと、これはあくまでも噂にしか過ぎないが、この討伐で生き残った人間が新しい軍の上層部に立てるらしい。それで、集まった奴らもかなりいるらしいが：。」

そんな噂があったのか。

知っていたかとザックを見ると、視線を逸らした。ゲイリーも同じく視線を逸らす。

知らなかったのは俺だけなのか。

そう思ったら、なんだか力が抜けた。

下らない内部抗争に俺は巻き込まれた上、今や殺されそうになっている。馬鹿馬鹿しすぎて、腹が起ってくる。

絶対に生き残ってやる。

それは出世がどうかという問題ではない。

ただあの紅い目の人形を、王城に帰った後に皇帝の目の前で殴ってやりたいからだ。

舐めやがって。

命をなんだと思っやがる。

『マサイアスの名を背負うには感情はいらぬ』

ナンダ、ソレ

なんだ、それ

なんだ、それ！！

そんなのは完璧、お人形じゃねーか！！

人を殺す事しか知らない、殺人人形。

そんなのは俺は認めない。

あの子供が認めて欲しいとは思わないと言っても、俺はそんなのは絶対に認めない。

なんだかわからない激情に突き動かされながら歩みを進めていると、いつしか森は途切れ、俺達の目の前には聳え立つ大きな屋敷があった。

館の壁には蔦が絡まり、ひっそりと静まり返っている。

あたかも、今から起きる惨劇を予見したかのような静寂。

「行くか。」

ブリッグハウス将軍…いや、ウエスのやけに低い一言で俺達はその屋敷に足を踏み入れた。

マサイアス家討伐―後編―

ラインハルトと別れた後、王城の広い廊下を独り歩く。すると、前から陛下と宰相が向こうからやって来たのが見えたので、脇に寄って頭を下げた。

「ヴィクトール、クリスを見なかった？」

朗らかな声が聞こえた。それが陛下の声だとわかっているのに、頭を下げたまま答える。

「元帥閣下でしたら、自室に下がりお休みになったとミカエリス將軍が言っていました。」

「クリスが？…珍しいな。」

「そうだねえ。あ、頭上げて良いよ、ヴィクトール。」

はっと短く答え、頭を上げた。目の前のお二人をまじまじと見てしまふ。相変わらず美女の如き華やかな美貌のレイエス宰相と、天使のような無邪気さと神のような神々しさを纏ったアレクサンドロ皇帝陛下。

我がルグレス帝国を支える三柱の内の二人。

最後の一柱。

あの人は今、どんな夢を見ているのだろうか。

「誰もいないのか、この屋敷は…。」

思わずそう言ってしまう程、マサイアス家の本邸はひっそりと静まり返っていた。俺とザック、ゲイリーにウエスの4人の他にも何十人かが同じく屋敷を探索していたが、肝心のこの屋敷に住んでいるはずの住人が見当たらないのである。本当にここで生活していたのかと疑うほどの整然さが、逆に不気味さを否応無しに自分達の恐怖心を煽る。

何部屋か探索していたがここに来て疲労が頂点に達した。それはここにいた大半がそうだったのだろう、誰からとも無く、最初に入ったダイニングルームで休憩を取る事になった。

ダイニングルームに集まった面々を見渡して、あまりの少なさに愕然とする。この屋敷に到達出来たのは、最初にいた人数の半数にも満たないようだ。

辺りには、不安と焦燥の入り混じるため息が自然と多く聞こえる。

ダイニングの端に置かれた振り子時計のカチカチという無機質な音が響く中、これから何が起こるのか、それだけが怖かった。

静かな中で、ボソボソと話されるのは自然とこの討伐に関する噂話についてだった。噂の内容はやはり、陛下の怒りに触れたせいでこの討伐が行われたとか、旧臣の一掃だとかだったが、不思議と選抜試験なんたら件の件は誰も知らないようだった。ウエスと同じく辺

境へと左遷させられていた奴らもまた知らぬの存ぜぬの一点張り。
ではなぜ、ザック達は知っていたのだろうか…。

俺の中で、ザックへの疑問が疑心へと変わるのは必定の事の様
に思えた。

「ザック、話があるんだが少し良いか…。」

「ああ、どうした。」

危険だと思ったが、リビングを出て近くの部屋に二人で入って、
ザックに問いかける。

「お前、選抜試験がどうたらって言う話…どこから聞いたんだ？」

「何だ、いきなり。なんか関係あるのか？」

「いいから、どこから聞いた!？」

怪訝そうな顔をしたザックに怒鳴るようにして詰め寄った。俺の勢
いに一歩下がったザックは、なおも訝しそうな顔で俺を見た後、一
息ついて話し始めた。

「ヴィクトール、とにかく落ち着け…いいな。…俺がその話を聞いた
のは今日が初めてだ。そもそもウェスから聞いたんだからな。大

体、俺の上官は先帝に尻尾振ってた奴だから、俺が選抜試験だなんて知ってたらおかしいだろ。」

「…そうだよな。って…ウエスから聞いた？何でウエスがそんな事知ってるんだ？あの人だって元は重臣だったとは言え、今は国境警備が任務だろう。そんな人がどうやって試験だなんだっていう事を知ってるのか疑問に思わなかったのか？」

「それはそうが…。何しろあのブリッグハウス將軍だぞ。あの『生きた伝説』のその人が言うんだ。嘘だと思う方が無理じゃないか。お前だってそうじゃないのか？」

「…確かにな。何かがおかしいのはわかるんだが、それが何なのか全くだ。いや、端からおかしいのはこの討伐そのものがそうなんだがな…。」

「おかしいのはあの小僧がクーデターなんて手を使って、皇帝になったせいさ。」

俺達じゃない声が聞こえた。

その時、背筋にゾワツと鳥肌がたつたと思ったその刹那、白刃が振り下ろされるのをどこか他人事の様に見ていたが、突き跳ばされた衝撃が体に伝わって初めてそれが自分に向かってきたのだとわかった。

キーンと酷く澄んだ音が鼓膜に届いた。

急いで体勢を立て直し周囲を見ると、ウエスが自らの愛剣である大振りの剣で見知らぬ若い男の剣を止めている。男の手には、細い剣が握られている。それが俺を狙った剣だとわかったのは、その細い

剣の刀身が言葉通り白かったからだ。

はっと気づいた。ザックは！？

慌ててウエスの後ろを見ると、俺と同じく突き跳ばされたのか、引っ張られたのかわからないが、尻餅について呆然としている。いつの間にウエスが……。疑問に思ったが、当人は剣を弾いて構えなおし、近寄ることが憚れる程の覇気を纏って男を睨んでいる。

睨まれている男はウエスを面白そうに見ていたが、やがて白い剣をブラブラと弄もてあそび始めた。

良く見ると、年の頃は十代後半と言った感じだ。黒い髪に黒い目を持つその男は、何が楽しいのか突然ゲラゲラと笑い始めた。

「おやおや、まさか『生きた伝説』のブリッグハウス將軍にお会いできるとは！ 恐悦至極でございます。……って言った方が良いのかな？」

「はっ！ その名は既に捨てているのを知らないのか、ガキ。でもまあ、君みたいなケツの青いガキが、俺の嘗かつての通り名を知っているのには褒めてあげよう。ご褒美だ、受け取れ！」

そう言ってウエスは一気に間を詰め、男に切りかかった。だが男はひらりとかわしたかと思うと、着地ざま剣を突きだす。ウエスの喉元を狙ったそれは目標に届く前にウエス自身の剣によって弾かれる。俺とザックはただその光景をただ啞然と見ていた。

その時、何の前触れもなく元帥がふらりと部屋に入ってきた。そこにいる四人を一瞥し、男を見るが表情が変わらないために、どういう反応をしているのかわからずにいると、元帥に気付いた男が見る

からに不愉快そうな表情に変わった。

「随分と偉くなったな、『忌み子』。貴様がこの屋敷にいる事に吐き気がする。貴様が此処にいるという事は、ミハエルも死んだのか。流石は『忌み子』だな。父上と兄上まで殺しておいて、更に弟まで手にかけてか。」

あまりの物言いに腹が立った俺は声を上げようと思ったが、元帥が手を挙げてそれを止めた。

「吐き気がするなら吐いたらどうですか、兄上。」

「黙れっ！！『忌み子』の貴様に兄などと言われる筋合いはない！」

「すると、兄上がマサイアス家の現当主になったんですか。では、すぐにこの討伐が済みます。楽で助かりました、ありがとうございます。」

「何だと!？」

「感謝と言っでは何ですが、わざわざ『生きた伝説』をお呼びしました。貴方は憧れてらしたんでしょう？クリストファー様が教えてくれました。ブリッグハウス、存分に遊んでやれ。」

「はい、では遠慮無く。」

にやりと笑ったウェスは、さっきまでとは打って変わった戦い方になった。防戦一方だった森の中での戦いや、先程の打ち合いと全く違う。

それを形容するならば、流水の如く。

水の流れのような変化に富んだ剣捌きに感嘆すると同時に、やはり『生きた伝説』の通り名は今も健在なのだと思い知らされた。あくまでもウェスは、軽そうに扱っている剣なのに対して、受ける側の男は明らかに顔色が変わってきているのが見てとれた。一撃が相当重いのだろう、男はウェスから繰り出されるそれに耐える様な戦い方になっている。

「どうした、ボク。まだおねむの時間なのかな？折角マサイアス家の人間と手合わせ出来るって言うんで期待してたんだ。早く目を覚まして、俺の相手してくれないか？」

くくくと笑ったウェスの顔は酷薄そのものだった。

怖いと単純に思った。

そして、器が違うのだとも。

「ちっ！言ってくれるね、ブリッグハウス將軍。じゃあ、僕も本気出さないと。おい、この屋敷からこいつらを生きて出すな。誰一人として生かすな！！全員殺せえ！！」

「御意に。」

どこからともなく現れた刺客を残して、男は姿を消した。

「ほお、どこにこれだけの人数が隠れていたんだか。驚くと言うより、呆れるな。閣下、どうします？」

「どうするも何も、全員殺すまでだ。ブリッグハウス、当主を討つていいぞ。私は雑魚の相手でもしてるから、存分にやるといい。ただし、手応えがなかったとしても文句は聞かん。」

ふっと笑ったウェスは了解と言った後、男を追って出て行き、元帥もそれを見送り平然と出て行った。

残された俺とザックは、襲ってきた奴等からの攻撃を必死になっかわす。部屋には五人はいる。それも全員手練れと来てるしな。一瞬でも気を抜いたら、確実に殺られる。

ここまで来たら、既に覚悟は出来ている。

俺は生きる。

それだけだ。

流石に二対五はキツイ。だが、こいつらは確かに手練れだが、雑魚だ。俺だって戦場へ出ているし、一部隊を率いてもいる。人数では不利だったが、なんとか全員を静かにさせた後、肩で息をしている

ザックを見た。血で塗れた顔がいやに歪んでいる。

「どうした、ザック。どこかやられたか？」

「…いや…何でもねえ。それより他の皆と合流しねえと。それに、ウェスと元帥も…。」

「おお、そうだな。しかしよ…一体どうなってんだ、ここの家族。あの当主って奴、明らかに元帥の事嫌ってたか。何て言ってたっけ…『忌み子』…?」

「あんま考えてんなよ。この家は狂ってやがる。頭悩ますのなんて無駄だろう。」

「…まあな。」

釈然としないまま、食堂に行くと、そこでも一騒動あったらしい。ゲイリーと何人かが生き残っただけのようだ。その奴らと一緒にエントランスに出ると、全員が一樣にして息を飲んだ。

辺り一面が真っ赤だった。

血の海とはこの事だと初めて知ってしまった。

いくつも死体がある。

ホールから続く階段には、折り重なる様に死体が連なっている。手すりに凭れるように事切れたメイド達、腕が手すりに引っかかっている使用人。それでも原型を留めているが、ホールの死体はもっと酷い。

体の一部が無かったり、胴体が切り離されていたり、中には内蔵が飛び出している死体や、首がない死体もあった。

玄関ドアに貼り付けにされていたのは、燕尾服を来た執事と思しき老人だった。その手にあるサーベルは自分の胸に刺さっている。

まさに地獄。

その地獄を造り上げたのは、他ならぬ元帥だ。

血の海の真ん中にポツンと佇んでいるその存在は、やはり周りと同じく全身が血まみれなのに、手に握られた双剣と黒い髪が鈍く光るその光景は、どこか神聖で近寄りがたかった。

剣からポタポタと滴る血は凝固しておらず、つい先程まで殺戮が行われていた事を如実に表している。

死臭に耐えきれなくなったザックやゲイリーは顔を背け、吐いた。俺もたまらず吐き出しそうになったが、なんとか堪えた。

ザック達の呻き声を聞いた小さな体がこちらを向いた。辺りと同じ、

血のような真紅の瞳は相変わらず感情が全く感じられない。

気付いたら俺は子供の頬を叩いていた。きょんとした目が俺を見ているが、構わずに片腕に抱え上げて近くにあった椅子に座らせた。身体が小さい分、椅子が余る。

「…何事だ。」

「お前、あのままだと戻ってこれなかっただろ。俺達まで殺されるのは御免だからな。…おい、ラインハルトはどうした。あと付いた護衛も。」

「ラインハルトはブリッグハウスに付かせた。護衛はそこにいるんじゃないか？後ろから悲鳴が聞こえたから。」

「…なっ！まさかお前が殺し…っ」

「違う。」

それきり黙った元帥を見下ろす。血まみれの顔を見てうんざりしたので、血を拭ってやろうと拭くものを探したが、何もないので仕方なく自分の袖で拭ってやった。若干強めにグリグリと拭ってやるが、文句も言わずにされるがままの元帥は、こうしていると随分と幼く見える。そういえばまだ十かそこらじゃなかったかと思ひ出す。未恐ろしい子供だ。ここままだかくなったら帝国を一人で守れるんじゃないかねえか？

それこそ、クリストファー・マサイアスのように。

「おや、随分静かだなと思ったら、閣下はそんなことされてるんですか。陛下と宰相閣下に叱られますよ。」

やけに飄々とした声がホールに響いた。その声のした方が見ると、ウェスとラインハルトが死体の山を押しつけて、階段を降りてくる場所だった。

「終わったか？」

「はい、もちろん。」

「どうだった？」

「まあ、それなりに愉しめましたよ。だがやはり閣下ほどではなかったです。今一度手合わせ願いたいものですが…ね？」

「陛下の許可が下りたらな。」

「おや、それは残念。」

くすくすと笑うウェスを呆然と見てみると、俺の視線に気付いたウェスはああと破顔した。

「そう言えば、ヴィクトール達も無事だったか？」

「はい…。ウェス…いや、ブリッグハウス將軍…あんた一体何者だ

？」

「俺？俺はウェストン・カールリッジ・ブリッグハウスだ。お前達が『生きた伝説』と呼んでいる…ね。」

全ての事はそれで事足りる。

彼はまさに『生きる伝説』。

成程、先帝が殺せなかったわけだ。殺すには惜しい、その人材。それがブリッグハウス將軍ってわけか。

帰途に着いた時、ウェスに腫れた頬の事を指摘された元帥は何でもないと言ったが、ラインハルトに睨まれ、ザックラには遠まわしに目線を送られたが、俺は何も言わないでおいた。

「おかえり、クリス。」

城に帰るなり、陛下から直々の出迎えがあつて驚いたが、それよりも驚いたのが、元帥の腫れた頬を見た瞬間の陛下の表情だった。いつもは天使のような陛下の笑顔が、魔王の如き黒いオーラが^{ひしめ}く邪悪な笑顔に変わってる。笑っているのに、笑ってない。宝石の様な美しい瞳は、軽く血走っていた。

そっと手を伸ばして、壊れ物を扱うようにして元帥の頬を両手で包んで、心配そうに痛い？と聞いた陛下にふるふると首を振って否定した元帥。その光景を見て、一体俺は何を見ているんだという不思議

議な気分になった。

後から来た宰相もその頬を見るなり、形のいい眉をピクリと動かし、た。震えるほど空気が凍っているが、それを物ともしない陛下と元帥、それにウエスが凄い。

陛下は、俺達にご苦労、今は休めと言って元帥と宰相を連れてその場を去っていった。

「おーおー…こりゃあヴィクトール、ヤバいんじゃないかあ？相当怒ってるぞ、陛下。それに宰相も。」

「知るかよ…。」

「ふっ、そうか。ああ、いいこと教えてやろうか、ヴィクトール。」

「何だよ。」

ウエスが面白そうに俺に耳打ちをして、その内容に俺は凍った。しばらく俺を呼ぶザツクの声が聞こえず、ただ固まっていた。

『元帥は、お二人のお気に入りの子だから。顔に傷付けなくて良かったな。』

結局、マサイアス家討伐で殺された人数は双方を合わせて400人近い。

残ったのは俺とザック、ウェスとラインハルト、それにゲイリーや他何人か……。それしか生き残る事が出来なかった。

その後軍は再編され、俺達もその中に組み込まれた。それも軍の上層部ではなく、元帥や宰相直属の隠密部隊の部隊長に。

しかし、その中にザックが入ることは無かった。あの後、ザックは精神を病み、結局それを理由に除隊した。辞める時に少し話したが、引き止めはしなかった。

ザックは夜中に飛び起きたり、奇声を上げたり、常に剣を離さずに挙げ句、人に斬りつけたり。何があったかを知っているからこそ、同情は出来ない。

ザックは俺と表裏一体だ。

俺がああなくてもおかしくなかったからこそ、同情しなかったし、引き止めもしなかった。

今、ザックは帝国病院精神病棟にいるらしい。

会いには行っていない。

多分、会ったらいけないんだと思う。

ウェスに元帥が女の子だと聞かされた時は固まったが、はっきり言

ってそれがどうしたんだ。

子供でも殺せと言いつつ元帥は、おそらく女の子扱いされるのは望んでいないのだろう。

と言うか、迂闊に女の子扱い出来ないだろう。

如何せん、陛下と宰相が怖すぎる。

今や、元帥が女だと言うのは密かに知れ渡っている事だが、表立ってそれを言う馬鹿はいない。

言ったが最後、そいつは確実に朝日を拝む事はないだろう。

だから、俺は思う。

せめてあの無表情を止めて、笑ってくれないかと。

マサイアス家討伐―後編―（後書き）

マサイアス邸は、初代バイオハザードの洋館がモチーフです。食堂にある時計とか、もろパクリです。

多分マサイアスの屋敷内にも仕掛けがいっぱいあったはず。天井が落ちてきたり、毒ガスが部屋中に充満したり。

ゾンビが出て来ないのが残念です。

生きた伝説―前編―（前書き）

ウェス：ブリッグハウス将軍視点です。

生きた伝説―前編―

「おい、ブリッグハウス將軍だぜ…」

「ああ、本当にいたんだな…」

遠巻きに言われるこの台詞も大概聞き飽きた。そして、その後にく言葉もわかつていく。

「生きた伝説…か」

「どうした、やけに浮かない顔をしている」

「閣下」

いつの間にか隣に立っていたのはルグレスの元帥閣下だ。將軍職に就いている俺ですら気配がなかなか読めないところを見ると、他のやつらは全くわからないだろう。

長い黒髪に赤い目。それだけでも目立つ容姿なのに、人形のように白い顔には表情が全く無い。身体もまだまだ発展途上のくせに、人を殺すことには異常に長けている。それもそのはず、俺の『生きた伝説』という馬鹿げた二つ名を凌駕するほどの家名を持っているのだから。

「マサイアス閣下、こんなところで何を？」

「暇だから手合いに来た。丁度いい、相手をしてくれないか。他の奴らは私の相手にならない」

「：陛下から許可は得てますか？」

「取っていないが、まあいいだろう」

無表情に言い切った子供…もとい元帥の言葉を反芻する。つまりは、天使の様なアレクサンドロ陛下に無許可で俺と手合いをするという事か。陛下の閣下に対する執着を知っているからこそ、断りたい。しかし、さっさと鍛錬場に出してしまった以上は誰かが相手をしなければならぬ。あいにく、いつもくっ付いているミカエリスがいない。となると、やはりここは俺が相手をしなければならぬのか。後で呼び出されて、陛下にネチネチ嫌味言われるんだろうか。多分…十中八九、その場には、あの女顔の宰相もいるはずだ。内密に提出を要求される始末書程度ですめばいいのだが。

いつもは皆の鍛錬を見ているだけの元帥自身が鍛錬場が上がっている事を聞きつけた軍人が俄かに集まりだし、あまり広いと言えない場内を熱気と言う名の興奮が包んだ。こんな風に熱気が包むと言うのも、案外悪くはないのかもしれない。とは言え、それが元帥と俺の手合いというのが気に食わないが。

「準備は出来たか？」

「ふー…閣下、一応手加減はしてくださいよ。いくら問題が解決した直後だとは言え、何が起こるかわからないですからね」

「善処する。と言っても、お前は私に手加減はするなよ。もしも手を抜いたら、私は全力を出す」

「：怖いですねえ。じゃ、行きますよっ！！」

『生きた伝説』

俺がそう言う風に呼ばれるのには理由^{わけ}がある。

と言っても、それが格好いいかと言えはそうでもない。

いつしかその二つ名だけが一人歩きし、『ブリッグハウス将軍』は『生きた伝説』とくっ付いているのが常になった。

ウェストン・カールリッジ・ブリッグハウス

俺はルグレス帝国の中でも力のあるブリッグハウス家の四男として生まれた。

家は伯爵位を持っていて、皇帝の覚えも良く、帝国内にも莫大な財産を持つ有力貴族の一柱だった。三人の兄と、二人の姉に囲まれた俺は、早くから家の貴族然とした態度と考え方に共感できずに、幼い頃より市井の子供達と遊んでいた。当然、それを良く思わなかった両親や兄姉達に事ある毎に叱責を受けたが、俺には何故叱られているのか全く理解出来なかった。

汚いから、貧しいから、卑しいから。お前とは住む世界が違うんだ。そんな事を言われても、俺と一緒に遊んでいる子達は俺を仲間にしてくれるし、住む世界が違うとも言ってこない。むしろ、そんな事を言っているからいつまでも同じ所で停滞しているのだとは思えなかった。

いつも遊んでいたおかげで、勉強は全くやらなかったと言っても過言ではない。とは言え、出来が悪いと言われてもそうでも無い。教えに来る家庭教師のひけらかし顔がどうにも好きになれずに、頻繁にフケては父にばれて、大目玉を食らうのが常だった。

ただ、戦史や軍略関係の勉強は好きだった。数学や理系の勉強も進んでやりはしなかったが、特に苦ではなかった。ただやはり貴族が習う素養や、貴族感だけは理解し難く、最後には全く手をつけなかった。

いつしか俺はブリッグハウス家の落ちこぼれと呼ばれるようになった。有力貴族であるブリッグハウスの名を掲げるのを恥ずかしいと言いつつ父により、何も知らないまま、俺は最も最下層の軍に入隊されていた。

ナバレル皇帝が帝位に就いていた頃、軍の立場は非常に悪く、皇帝が無茶を要求するために実際に虐げる側の軍人は民に恨まれ、常に肩身の狭い思いをしていた。それでも貴族連中や皇帝の要求は留まる事がなかった。

国と民の板挟みになった軍人が次々と辞めて行く状況を見かねた当時の元帥以下幕僚達は、嫌な仕事を新人等の下っ端に押し付け、更にはその辞表すらも受け取ってもらえないと言う有り様だった。

―軍人になんかなるもんじゃない―

それが俺が入隊した頃、国中で当たり前のように言われていた。

有力貴族である為、そんな状態を知っているはずの父が俺を軍に放り込み、それから一切の繋がりを絶った。

なる程、出来損ないの四男坊を厄介払いするのに軍は最適だったと思う。一応は軍所属と言う事でブリッグハウス家のメンツは保たれるし、どこで死んでも国で埋葬してくれる。最悪、戦争で死んだとしても、国からは伯爵家にとってはした金だが、幾らかの金が出る。俺が死んでも、損はしない。父親の判断は偉く冴えていたと思う。

ただ、俺は生半可にガキの時分、街で遊んでいたわけじゃない。ブリッグハウス家の出来損ないは出来損ないだが、街の中ではガキ大将と言ってもいい位には強かった。また、家中では俺が一番デカく、剣術では三人の兄達を差し置いて俺が一番強かった。

その頃実は、遊んでいる時に街で出会った剣聖と呼ばれた人に手解きを受けていた。後に師匠と仰ぐ事になるその人の剣は、例えるならば水のように姿を変えるものだった。

強く、しなやかで、それでいて他を圧倒する力を持っていた師匠に憧れて、がむしゃらに師匠を相手に剣を振った。

それのおかげかもしれない。軍に入隊してからは、いくら扱きのよきな訓練があっても、周りが脱落する中、へこたれずにずっと付いて行く事が出来た。

軍の中で、ブリッグハウス家の者だと言う事は全く考慮されない。

むしろそれで良いと思っていた。

父が俺を出来損ないと呼びたいのならそうすればいい。軍では皆が平等に俺を見てくれる。ただのウェスとして扱ってくれる。それでいい。

昇進試験の類もあることはあったが、俺はそれを受けずにいた。昇進試験だなんて言うのと崇高なものに聞こえるが、当時はコネが日常茶飯事だったし、コネが無い下っ端でも試験官や上官連中に賄賂を贈れば自動的に取り上げられる仕組みになっていて、実際俺や他の実地に出ている奴らより遥かに実践経験の無い者がスイスイと少佐や中佐になって行く。

別にそれで問題が無いのならば、俺も関知しない。威張り腐った奴らと言うのは、俺が嫌う貴族連中とどこか酷似している。人を人と思わないような見下した目を持っている。

だから俺や仲間の何人かで鍛錬と称して、如何にも使えない口だけが異様に達者な上官を引っ張り出すと、案の定何も出来ぬまま腰を抜かし、あげくに自分で躓いて怪我をした。そこまでは良かった。そこまでは。

「ブリッグハウス以下、アタマ自治区の盗賊団一掃作戦に参加するように」

アタマ自治区。

あそこは昔から帝国に組み込まれた事を良しとしない地域で、未だに帝国の法令が届かずに、自治区扱いになって長くもつぱら反乱軍のアジトと称されている。また、アタマ自治区には窃盗と残虐行為を厭わない非道な盗賊団の存在も確認されている。確実に帝国内でも最も治安が悪いその地区は、帝国内でも問題視されていて、いく

ら軍と言えどおいそれと手出しが出せない地区だった。

まあ、そこに行けと言う事は要するに、俺達に死んでこいと言っているようなものだ。

「面白い。盗賊団を残らず捕まえて帰って来たら、俺を將軍にしてくれるか？」

俺がそう言うと、馬鹿にしたように笑いこけた幕僚の幹部達は、必ずやしてやろうと言う言質を取った。

それで俺はやってやろうじゃないかとニヤリと笑い、仲間達と共に軍宿舎を後にした。

噂に違わず、アタマ自治区の治安は桁外れに悪かった。街には女子供の姿は無いし、人相や風体の悪いゴロツキ共が胡乱気な目で俺達帝国軍の軍服を見ている。

全く人気のない街なのに、どこか狂ったような覇気がある。それをゾツと思う気持ちなんぞ、とうの昔に無くしていた。

この時の俺は、ある種^{たが}籬が外れたような気分だった。破れかぶれでもない、何というか：ここで死んでもいいし、生きて帰ったとしても將軍職が待っている。今考えれば、アタマ自治区の狂った空気に当てられていたとは思えないのだが、若気の至りというやつだと言われれば、そうだとしか答えようがない。

突入時は、無鉄砲にも敵地に一人で突っ込み、敵を一人残らず殲滅させ、戦略を練って行動しなければいけない時には、ネズミ一匹逃

がさないような完全な包囲網を敷いた。

盗賊団との一進一退の攻防が続く中、それでもジリジリとだが先が見えてきた。たがそんな矢先に、何も知らない、わからない帝都からやってきたクソ野郎が、俺達を統括する上官になった。

地位だけが無駄に高いその男が、軍幹部からの回し者である事は容易に判断出来た。それまで笑っていた幹部連中が、困難だと思っていたアタマ自治区の盗賊団征伐があまりの順調に行っている事に焦ったのだろう。なんと言っても、保身だけを考えているような連中だ。机上の戦略は出来ても、実際の現場の状況は知らない。このまま盗賊団が一掃され、俺が生きて帰ったら將軍職をやらなければならぬ。それを危惧したのであろう事はバカでもわかった。

面白みが無い奴らが上にいると、本当につまらない。

新しく来た上官の男は、無能の一言に尽きた。

不適格な指示、無謀としか思えない突入のタイミング、その場を弁えない無責任な言動。様々な失態を繰り返した上官は、威張りくさる事『だけ』は優秀だった。

下っ端を完全に見下し、なまじ俺はブリッグハウス家出身だと言うことで因縁を付けられるだけ付けられた。別に俺はブリッグハウス家の出身だからと言っても、既に父親から絶縁を言い渡されているし、何を言われても平気だったのだが、頭の弱い上官は事ある毎にいちやもんを付けて回った。

そのしつこさに、とうとう腹に据えかねた俺の同期の男がその上官を殴った。驚いたと言うもんじゃない。何故気にしていなかった俺ではなく、こいつが殴るのだと。

俺が唾然としていると、今まで激戦を共にしてきた連中までもが、管轄長をたこ殴りにしていたので、我に返って俺は慌てて止めた。

ボコボコにされた上官はボロボロになりながらも、怒りが収まらなかったのだろう。最凶だと言われ、今まで手が出せなかった最重要拠点に俺と、上官をボコった連中が行かされる事になった。

「お前ら、何でそこまで？」

「当たり前だろ！今までずっと泥水すすってきた俺らがお前を擁護してやらなくて、誰がお前を擁護すんだよ！！！」

「そうだ、お前は伯爵家の人間だからと言っても、ほとんど俺達と生死を共にしてんだよ。だから、実家の親兄弟より俺達の方がお前を知ってるんだぜ？」

「おいおい、気持ちわりい事言ってんじゃねえよ！いいか、ウェス。お前はブリッグハウス伯爵家の人間じゃねえ。ウェスって言う、俺達と同じ軍人なんだよ。それに、お前の戦略眼は確かだ。これから行く拠点を落とせばお前は將軍だ。間違ってもこんな下らねえ事でグチグチ言うんじゃないぞ」

「くぁー！！くぁーっこいいー！！！」

「うるせーぞ！！おい、ウェス、わかったら返事！！！」

仲間達の熱い言葉が胸に染みた。今までこんな風に言ってくれた奴らはいなかった。伯爵家の末っ子で、子供の頃は貴族の子息達と上辺だけの会話をし、下町に遊びに行けば、伯爵家の人間だとどこか一線を引かれていた。

軍に入った時も、破れかぶれの気持ちと、どこか苛立った気持ちを
持って任務に当たった。それが結果として成果を上げているのは否
定しないが、相変わらず冷めた気持ちがあるのもまた、事実だった。
仲間達との付き合いは可もなく不可も無く。それなのに、こんな自
分を見ていくれた連中がこんなにもいた事に感激すると共に、今
まで無碍にしてきた本気の気持ちを伝えていなかった事に辟易する。
だからこんなにも熱い言葉を貰った今、目頭が熱く感じるのかもし
れない。それを目敏い奴らに見せるつもりはないが、今まで第一線
をくぐり抜けて来た猛者揃いだ。バレているだろうが、それでも冷
やかす者は誰もいない。

こんな奴らを、今ここで失うわけにはいかない。最凶であり、最重
要拠点だと理解しているからこそ、甘い気持ちで突入したら生きて
帰っては来れない。

一分の隙もなく、完璧に。
ネズミどころか、空気すら漏らさぬ程の綿密さで戦略を立てなけれ
ば。

豪快に笑いながらも、死地に赴こうとしている奴らの目には、生へ
の諦めと言う物が無い。だからこそ、俺も笑う。
全員無事に帰ってくる。

ニヤリと笑った俺を見て、連中は不敵に笑んだ。

決行は月の無い深夜。

一気に方を付けなければ、人数で劣る俺達に勝機はない。

黒尽くめの服を着込み、手で合図をして、音も立てずに潜入していく。

見張りの首をかき切り一瞬で仕留め、拠点の内部へと侵入していくと、金品を抱えた驚く程の人数がそこにいたが、全員が酩酊状態であるか、薬物でウリっているかだった。

出口を完全に封鎖し、入り口に近い奴らから躊躇なく排除していく。なまじ今まで死地をくぐり抜けた奴らばかりだ。腕の方も確かなのばかりが揃っている。たまに手強い奴がいても、躊躇いと容赦を無くした俺には、全くの雑魚だと言っても過言ではない。

怒声と剣と剣が弾き合う音、死に往く人々の断末魔だけが部屋中を席卷する中、ただひたすら前だけを見据え続けていた。

盗賊団の重要人物だと思しき奴らを生かしておかねばならないので、それはそれで面倒だったが、それでも俺達には一人の死者も出ずに捕縛は成功した。

息を切らした面々が捕縛した男共に近付くと、強引に立たせて拠点を後にする。

俺達の様子を離れた場所から監視していた部隊が突入し、そいつらを引き渡すとうまく一息が付けるようになった。

しばらく独りにしてくれと頼むと、気を抜くなよと忠告した何人かが入り口に残って俺の様子を垣間見っていた。

累々と死体が転がっている部屋を、ただ目の中に見るとも無しに映す。

特に感慨は沸いてこない。

自分達が奪った命と、血塗られた手。後悔はしていない。誰一人欠ける事無く、この拠点を落としたと言う実感も無い。

一種の達成感に伴う喪失感。

多分その言葉が正しいのだと思う。虚無感まではいかないものの、何かぼっかりとした穴がどこかにあることを漠然とだが感じていた。

ただ黙って部屋の中央に佇んでいると、キーンと言う寒気のような殺気を感じた。

「ほう…なかなかやるもんだな…」

自分の背後から聞こえた声に全身が総毛立った。瞬時に反応した俺は、躊躇う事無く、声のした方向に剣を向けた。

「おや、まだまだ青臭いなあ。僕ちゃんや…」

くつくつと笑う木霊のような声はするものの、一向に声の主が見えない。油断する事無く周囲に気配を張り巡らせると、吹き抜けになっていた天井のシャンデリアに独りの男が腰掛けていた。

「おっ、ようやく気が付いたか。ここが落ちたと聞いたで、急いで見に来てみれば…お主等だけで落とすとは大したものだな」

「貴様…何者だ!!」

「ほうほう、威勢のいい若者は好きだ。うちの孫の婿に是非とも欲しいのう」

そう言うと、高いシャンデリアからふわりと音も立てずに着地した男は、肩に長剣を担ぎ、如何にも場慣れしていそうな雰囲気を出していた。

「ワシの名前はクリストファー。主の名前はウェストン・ブリッダハウスだろう？」

「………」

「そう睨むな。別に何もせんて。しかし、ここを落としたとなれば、アタマ自治区に跋扈していた盗賊団は一掃されたなあ。と言うことは、僕ちゃんは帝都に帰れば將軍か」

ぎよつとして思わずクリストファーを睨むが、一向に気にしている様子はない。そればかりか、入り口で隙無く構える奴らに飄々と手まで振っている。

「今の皇帝に仕えるのは、お前にとっては残念かもな。それよりだったら、次代の坊やに忠誠を誓った方が良からう。これはワシの忠告だ。大人しく聞いておけよ、僕ちゃん」

「誰が僕ちやんだ!!」

「まあまあ、そんなに短気になるな。：しかし本気でうちの孫はどうだ？まだ赤子だが大した器量になると思うのだが：」

「遠慮する」

「それは残念だな」

なおもくつくつと笑うクリストファーと名乗った白髪の男を見る。
何なんだ、この男。

全く隙が無い。一分の無駄もないしなやかな動きで、歩いているこの男。いやに帝国の事情に詳しい。自分が將軍職を得るかもしれないという話ばかりか、次代皇帝の事まで持ち出した。この男は一体、何者なのか。

クリストファー。

どこかで聞いたことのある、その名前。

帝国に詳しいクリストファー。

そこまで考えて、脳裏に一筋の可能性が出て来た。いや、まさかそんなはずはない。

だいたい、先代の皇帝が亡くなってから以降、行方知れずだったはずだ。それなのに、今日の前に立っているはずがない。

「皇帝の狗…」

クリストファーと名乗った男は、ピクリと眉毛を動かしたが、それだけだった。飄々とした笑みを崩さず、現れた時と同様にあつと言う間に姿を消した。

噂でしか聞いた事の無い先代皇帝の狗、クリストファー・マサイアスに会って呆然としている中にも、着々と事態は動いた。

帝都に帰還し、そのまま將軍職に就けるのかと思ったら案の定約束は反故にされ、ますます危険な地域に派遣された。それでも死ぬ事無く毎回帰還する俺にも、部下が出来、その部下達にも恵まれ、軍の中でも着々と地位を上げていく。

遂には功績がナバレル皇帝直々に認められて、軍では最年少での將軍に任命された。

そんな俺にいつしか『死地から必ず帰ってくる男だ』という噂が立ち、それが派生して、ブリッグハウス將軍は『生きた伝説』と呼ばれる事になるのだが：

將軍の任命式は城で行われる。

將軍にしか許されない正装である城の軍服を着て、登城する際に、俺は人生をかけるべき人に出逢う事になる。

自分の一生をかけて護る人に出逢えるなんて、そうそうあるもんじゃない。

伴侶を選ぶよりも出逢える確立が低いその人に、俺は逢えた。

俺達のルグレスの未来を託す事になる、その人。

アレクサンドロ王子に逢ったのは、まさにその任命式だった。

生きた伝説―中編―

「ぐっ…！」

「まだバテるには早いぞ」

全く容赦のない双剣。操るのは若干13歳の子供。

だが、軍の中で頂点に立つ元帥の剣は俺が入隊して以来交えた中で、誰よりも重い。

無表情で無感情の顔からは、次の一手がどう繰り出されるかの予想が出来ず、かと言って自分から突っ込むのは確実に相手の罠に飛び込む様な自殺行為。いやはや、これで13の女の子だなんて恐ろしいってしまふ。

剣を構え直した瞬間パンパンと手を叩く音がして、次いでミカエリスの声が出た。

「閣下、ブリッグハウス将軍、そこまでです」

「ラインハルト」

「私が少し目を離した隙に…。全く、あなたも断ってくれればいいのに」

「それが出来れば苦労はしないさ。閣下、残念ですが…」

「わかった。仕方がないな」

額に汗をかき、息があがっている俺に対し、絹糸のような黒髪は相変わらず一筋の乱れもない。無表情な顔には疲れと言うものが見えないが、それはそれで末恐ろしいと思う。

閣下は双剣を鞘に収めると、ミカエリスに促される形で鍛錬場を後にした。少し物足りない感じもしないではないが、あれ以上やると俺も閣下も本気になってしまい、多分どちらかが：九割俺が死ぬまで剣を修めなかったはずだ。全く、ミカエリスも抜け目がない。

ふうと額に浮かんだ汗を拭ってぐると辺りを見回すと、俺と閣下の剣に見惚れたのか、恐ろしさに震えているのか――まあ後者だろうが――俺が振り返るなり息を止めていた面々がようやく溜まっていたそれを吐き出した。

ざわざわとしていたものがいつしか喧騒になったのは以外に早く、俺と閣下の手合いを見る事が出来なかった奴等に興奮して教えているのも何人かいたのが見えた。それにふっと笑って鍛錬場を後にする。

ミカエリスが呼びに来たと言う事は、多分閣下を止めたのは陛下。

彼女：皇帝の狗であるマサイアス家の飼い主であると共に、この国の絶対王者。

そして、俺の主でもあるアレクサンドロ皇帝。

ルグレス帝国将軍は総勢5人。

国の国境である東西南北を守護する将軍4人と、中央を守護する将軍1人で構成されている。その中で一番有名だったのは中央守護のミカエリス将軍だったのだが、俺が入隊してから直ぐにアルナージ

村事件で失墜、その穴を無能の一言で尽きる男が埋めた。

配属当時中央軍に所属していた俺は、多少なりともミカエリス將軍にお会いする機会があったのだが、事件のあった時には既に配置変えをされていたのでその詳細はわからない。しかし、あの公明正大で不正を嫌うあの方がそんな野卑な事件を起こすわけが無いとミカエリス將軍を信頼していた軍人から、特に中級・下級仕官連中からの奏上は多かった。それがナバレル皇帝はおろか、当時の幕僚連中に一考すらされなかったのは、なんらかの力が働いているというのが俺達の中で囁かれた噂だった。

そんな黒い噂がある將軍連中だったが、南方守護の將軍が急死したというので俺がその穴を埋めるべく拔擢された。ブリッグハウス家の人間だったと言うのもあったのだろう、そうでなければ特権主義と選民意識に凝り固まった上層部に俺のような下官が上げられるわけがない。いくら手柄を立てようと、下級仕官がのし上がれるのは精々大佐までだし、中級で准将まで。ここに来ての家名での就任は正直言って、厄介だったと言うよりなかった。

しかし、俺と死線を潜り抜けて来た連中や俺の部下達は諸手を挙げて喜んだ。その光景があまりに異様だったので、ちょっとばかり引いたのは内緒だ。

なんでも、偉ぶった上層部に自分達と同じ釜の飯を食った仲間が入るのは嬉しいんだぞ！と酔った勢いそのままに背中をぼんと思いい切り叩かれ、あまりの痛さに思わず呻くほどだったが、そんなにも他人の事で喜んでくれるこいつらがいるならと、將軍への就任要請にサインした。

就任式。

帝都の王城に將軍だけが着る事の許される軍服を着て、中に入る。城を守っているのも軍の連中のために「おめでとうございます」と

いう祝いの言葉を笑顔でかけられる。その言葉に「ありがとう」と答え、就任式が行われる謁見室への廊下を歩いていた。

「あなたが今度の南方將軍？」

その声が聞こえたのは、まさに謁見室へ扉の前。一緒にいた上官や、俺の部下達が振り返ってその声の主を確認すると、一斉に膝を折った。

そこにいたのは、まさに天使のような子供。銀髪・紫眼のキラキラとしたその子供は、見る者すべてを虜にするような可愛らしい笑みを浮かべ、こちらを興味深々と言った感じで見ていた。

そう、この子供は…そう思い至った瞬間、俺も皆と同じく膝を折っていた。

「アレクサンドロ王子、このような場所でいかがなさいました」

「今日南方將軍の就任式だって兄上から聞いたんだ。兄上は同席出来るのに、僕が出来ないのはおかしくない？」

「王子はまだ小さくていらっしやいますから」

「僕はもう8歳だよ!!」

「まだ8歳でいらっしやいますよ」

笑いながら聞きわけのない子供を窘める様にしている上官の言葉に、

ぶくつと可愛らしく頬を膨らませた王子は、今日の主役である俺を見ると目に見えてご機嫌になったようで、たたたと俺に駆けて来ると興味深々と言った感じでじーっと見ていた。

「お初にお目にかかります。私はこの度南方將軍を拝命いたしますことになりました、ウェストン・ブリッグハウスと申します。是非お見知りおきを」

「おめでとう、ブリッグハウス將軍。僕はアレクサンドロ、よろしくね」

につこりと笑んで握手を求められたので、それに答えるべく手を差し伸ばす。その瞬間、俺は何が起きたのかわからなかった。可愛らしい天使は俺にガバツと抱き付いて、耳元でボソリと呟いたのだ。

「現皇帝を見限って、僕の駒になる気はない？」

目を見開いてその言葉を反芻する。

駒とは一体何の事なのか、そして、その言葉を口走ったこの王子の本性が今皆に晒しているものとは全く別のものではないのか……。まさに今言った言葉は、天使と称される王子から発せられたとは一概には信じられない。この子にとってはナバレル皇帝は実の父で、しかも溺愛されているとの評判もある。そんな年端もいかない子供が発してもいい内容ではなかった。

まさに悪魔のような一言。

そういう矛盾した疑問を抱いたまま、俺から離れて去って行ったアレクサンドロ王子を呆然として見送っていると、中に入るぞという声がかかった。

そして俺は、王子の言葉の意味を深く理解することになる。

目の前に立ったナバレル皇帝は、まさに暗愚と言うに相応しい人間で下劣極まりなく、そしてそれを諫めるでもなく、ただそれを当たり前のように受け止めてその行いを止めようもしない皇太子に啞然とした。

近くにいた女官の身体にむやみに触ってみたかと思えば、その彼女を貶す言葉を吐き、さらにはその私生活を人前で晒し出す。かと思えば、近くにあったデカンダに入った酒を執務中でありながら平気で飲み、盛大にゲップをしたかと思えば、飲み終えたデカンダを下官に投げつけ流血させて喜んでいた。

皇太子はと言えば、我関せずを言った風情で目の前の光景を知らないふりをして平気そうな顔をしている。更にはナバレル皇帝に恫喝されて泣き出した女官に対し、「煩いから出ていけ」と慰めの言葉もかけない冷徹ぶり。

これが本当に俺が護るべき皇帝家の人間か？

そう考えるのは至極自然で、つい先程アレクサンドロ王子に囁かれた言葉が脳裏を駆け巡った。

『現皇帝を見限って、僕の駒になる気はない？』

こういう事だったのかと理解するなり、案外とすんなり腑に落ちた。

この皇帝は駄目だ。そして、その跡を継ぐべく皇太子も人の痛みをわからないようではいずればナバレルと同じ徹を踏む。絶対にそうだとはいいきれないが、可能性は高い。むしろならないほうが奇跡なのではないか。

ナバレル皇帝と、皇太子に可愛がられているというアレクサンドロ王子。

もし自分があの言葉の通り、王子の駒になるのであれば彼の人となりを知らなければ駒にはなりえない。

就任式を終え、正式に南方將軍をなつて任務地に赴く前にもう一度王子に会うために登城した。

案内されたのは、白亜の廊下を渡りきった突き当りにある小さな温室。そこは美しい薔薇や百合が並ぶような優雅なものではなく、小さな花が無造作に咲いているような本当に小さなものだった。

そこにいたのはアレクサンドロ王子ではなく、レイエス公爵家の三男坊であるルーカスもいた。確かルーカスという子供は、年に似合わぬ博識で文官たちも舌を巻くほどの頭の回転の良さから王子の友人という立場になっているはずだ。そして、ルーカスはもう一つ特筆すべきものがあつた。

それは驚くべきほどの秀麗な美貌を持っているということだ。少し長めの金髪を無造作に一つで束ねた髪に、エメラルドのような美しい碧眼。今でさえ優雅な貴族令嬢のように見えるのに、大人になったらさぞかしその美貌の虜になるであろう者が続出するだろう。これで男なのだから、生まれてくる性別が違つたらさぞかし傾国の美女になったであろうと思う。

思わずそんな事を考えていると、王子が口を開いた。

「やあ、南方將軍。そろそろあっちに行くんだって？」

「お久しぶりです、アレクサンドロ王子。はい、明後日にはあちらに行く予定になっています。」

「そう、あ、こっちはルーカス・レイエス。レイエス公爵家の息子だよ。」

「はい。お初にお目にかかります、先ごろ南方將軍に任命されたウエストン・ブリッグハウスです。以後お見知りおきを」

「始めまして。ルーカスです」

美しい笑顔の仮面を被ったままのルーカスが一步近づくと、後ろから物凄い殺気がした。ぞわっと鳥肌が立ち思わず帯刀していた剣を抜いて殺気の方角を探すと、呆れたような声がルーカスから発せられた。

「クリス、お前もこっちに来い。大丈夫だ、こいつはアレックスに何もしない」

「おいで、クリス。君も將軍に紹介しないといけないからね」

がさりと後ろの草木が揺れたと思ったら、そこから現れたのは小さな人影だった。

「將軍、紹介するね。クリスだよ。クリス、始めましては？」

「…はじめまして…」

ぺこりと頭を下げた子供をまじまじと見てしまうのは当然だ。あれだけの殺気を発した根源が、こんな小さな子供だなんて信じられない。

長い黒髪、真っ白な肌。それに、一際目を引く紅い眼。尚且つ、子供特有のコロコロと変わる表情が全くないので、人間でなく精巧に作られた人形にしか見えなかった。

そんな子供が先程の殺気を放った張本人だとは…。信じられない思いで目の前の紅い目の子供を見ると、ルーカスが口を開いた。

「南方將軍がここに來たって言う事は、貴方も俺達と同じですか」

「俺達？」

「そう。アレックスの駒になったのは俺もだが、このクリスも同じだ。少し違うのは、クリスは駒ではなく狗だと言う事です」

「イヌ…？」

「クリスの家名は『マサイアス』。軍に所属していた貴方なら、知っているでしょう。『皇帝の狗』」

マサイアス。

昔俺が一度会った事のある、あの方もまたマサイアス家の元当主。ほとんど伝説に近い、いや、俺の二つ名の『生きた伝説』というものは全く意味をなさないほどの伝説を持っている。

そう、クリストファー・マサイアスに俺は昔会った事がある。

そしてあの方は何と言っていた。

『今の皇帝に仕えるのは、お前にとっては残念かもな。それよりだったら、次代の坊やに忠誠を誓った方が良からう。これはワシの忠告だ。大人しく聞いておけよ、僕ちゃん』

『まあまあ、そんなに短気になるな。：しかし本気でうちの孫はどうだ？まだ赤子だが大した器量になると思うのだが：』

そう、確かにこう言っていた。

あの方はこうなるであろう事を全てを見通していたのか。あの時に言った言葉『次代の坊や』というのは皇太子の事だと思っていた。しかし、彼が言っていたのは皇太子ではなく、目の前の天使のような子供の事。

しかも、赤子って…。

「女の子…?」

ぼそつと呟いたはずが、その言葉を耳聴く聞いたのか王子とルーカスの両名に物凄い目で睨まれた。一体なんだ。

「なんでそれ知ってるわけ？パッと見でわかるわけないんだよね」

「將軍、誰から聞いた」

「あ、いや、あの…」

「ワシだ、ワシ」

後ろから飄々とした声が聞こえた。

この声は…

しかし、名前を呼んだのは俺ではなく、目の前にいた紅い目の子供だった。

「クリストファー様」

「久しいな、坊やに嬢ちゃん、それにクリスティーナ」

クリストファー・マサイアス。
一体何故ここに？

生きた伝説―中編2―

クリストファー・マサイアスが何故この場にいるのか。

目の前であの伝説でしかない男が、王子と公爵家の子息、そして人形のように表情の無い子供を前にして、至極嬉しそうな顔をしているのははっきりと見てしまった。

その笑顔は、まるで自分の孫を見ているかのように優しいものだ。

あまりに突然の事で驚いていたが、すぐさま意識を取り戻すのと同じ時にマサイアス家の老犬が俺の方に向き直った。

「ほう、やはり坊やの方に付くか」

「ん？ 翁知ってるの？」

「ああ。アタマ自治区の掃討作戦の時に少し、のう。そうじゃろ、ブリッグハウス伯爵家の末っ子や。いや、今は南方将軍と呼んだ方がいいのかの」

俺と彼が顔見知りだと言うことに驚いた顔をした王子だったが、それも一瞬で、すぐさま愛らしい顔が悔しそうに盛大に歪んだ。

「もー、やっぱり翁に先越されてたー！ せっかく僕が見つけたと思ってたのにー！」

「落ち着けアレックス…。大体お前もそう言う割には悔しくなさそうだぞ。…まあ、何はともあれ、卿の行動範囲は俺達より格段に広いからな。いい人材と知り合える機会もおのずと増えると言うものだろうさ」

「全く、お嬢ちゃんは随分と醒めておるわ。少しは坊やの愛らしさを見習わんかい」

「愛らしさ？アレックスの？俺がソレを見習えと？ははっ、それこそ冗談だろう、卿。なあ、クリス」

こくこくと頷いた黒髪の子供の反応にしかめっ面を披露したマサイアスは、はぁー…と大げさにため息を付いた。

「全く…我が孫ながらじじい想いに欠けるわい」

「そう言われましても。それを望んだのは、クリストファー様なのです」

「まあな。さて…。前置きはここまでにして、本題に入ろうか。なあ、アレクサンドロ王子」

「そうだね。さ、ブリッグハウス南方將軍。こちらに来てくれる？詳しい話をするからさ」

そう言って、四人全員が俺の方を向いた。

その時、何故だろう。俺は途轍もない場所に來てしまったのだという、困惑した気持ちに駆られた。

そして、この話を聞いたが最後、決してこの四人の側からは離れられないのだろうと言う事も、どこか感じていたのかも知れない。

黒髪の子供がクリストファー・マサイアスの孫だとか、アレクサンドロ王子やレイエス少年とどんな関係にあるのか。

沢山疑問に感じる事があったのだが、それを聞くより早く王子が口を開いた。

「率直に言うね、南方將軍。僕は皇帝位を狙ってる。狙ったからには必ず皇帝位は僕のモノにする。その為には、兄上である皇太子、そして父であるナバレルが邪魔なんだよ？」

啞然とした。

たった八歳の、子供が、一体全体何を言い出すのかと、単純に思った。

何かの笑い話なのか。その割には、あれだけ明るい顔を見せておきながら、今回に限っては嘘だよと冗談めかすつもりも無さそうで。クリストファー・マサイアスまで揃ったこの面子、何かあるだろうとは思ったが、まさかたった四人が集まっただけでこんな謀反の話を聞く羽目になるとは予想だになかった俺は、ただただ啞然とするばかりだ。

「なっ…」

「君もさ、南方將軍の就任式で見たでしょう？ナバレルのあの馬鹿さ具合と、皇太子の無情なまでの他人への無関心さ。あれじゃいくらルグレスと言えど、近々に崩壊してしまう。現に内側から除除に、除除に崩壊の音が鳴り始めているみたいだし。軍にいる君ならわかるよね？」

「そう。アレックスが言う通り、先だって、あのミカエリス將軍が罷免されて処刑されました。あれだけ人望があって歴戦の将だったあの方が、あのような野卑な事件を起こすわけがない。にも関わらず、事件そのものが全く黙殺されてしまったんですよ。一部の権力に取り付かれた奴等によって：ですけど。どうやら貴方や他の軍人達も軍部で動かれていたのでしょうか？事件を見直すようにとの沢山の嘆願書に貴方の名前があった」

「なっ！どっ、どうしてそれを：！」

幹部連中にもミカエリス將軍を救いたいと思っている人間がいた。だからこそそのミカエリス將軍の助命活動だった。ミカエリス將軍を慕っていた中央軍の軍人を始め、東西南北軍所属の軍人、そして俺も署名した嘆願書は王への上訴を行う前に一時保管され、それは発起人でもある幹部連中が嚴重に保管しているはずだ。

それにも関わらず嘆願書を軍関係者以外の者：なまじ王子と言えど未だ幼いアレクサンドロ王子は勿論、レイエス少年などが簡単にお目にかかれる代物ではない。

それにも関わらず、この子供達は言うのだ。

その嚴重に保管されてるはずの嘆願書を見た、と。

愕然としている俺を見て、王子は嗤った。

「ブリッグハウス將軍。本当に君、真っ直ぐなんだね。ますます気に入ったよ」

「…南方將軍、貴方は本当に軍上層部に、ましてや王に陳情される
とでも思ったんですか？ミカエリス將軍助命の嘆願なんて」

「…は…？」

「貴方達が陳情した時には既にミカエリス將軍の処刑は決定していたんだよ。王命で…いや、皇太子命令でね？つまり、君達がした嘆願は全くの無駄だったって事。あの嘆願書は秘密裏に処分されるところだったんだよ」

アレクサンドロ王子が愉しげに言葉を紡ぐ。

それは聞き方によつては「今日のおやつはなんなの？」とでも言い
そうな口調で。にも関わらず、紡がれた内容は俺の常識の範囲を意
図も簡単に飛び越える。

「あのね？ミカエリス將軍の失墜の影には現元帥とあの宰相閣下が
いる。ほとんど宰相の言いなりだからね、あの無能の元帥くんは。」

「貴方はご存知無いと思いますが、宰相の娘と皇太子の婚約が近く

発表される事になっています。その事に声高に反対されていたのが、
」

「そのミカエリスと言うわけだ。まあ陰謀めいた割には深くも無ければ面白くもなんともない。のう、南方將軍。お主も顔ぐらいは見たことがあるだろう？宰相マルケス家の、あの娘」

くくくと口許を歪めて笑った老犬に、頷いて肯定を示す。

アンナマリア・フローレンス・マルケス

現宰相、ロドリゴ・マルケスの愛娘にしてルグレス社交界の華。

誰しもが魅了されずにはいられない華やかな美貌と、男の本能を擦る肉欲的な身体。立ち上る色香に、思わず聞き惚れる甘い声。

アンナマリア。

彼女が会場にいただけで、色が増す。

ルグレス社交界にアンナマリア無しとまで言われた、名花中の名花。

しかしその実態は、場末の娼婦と見紛うばかりの醜惡な男好きでも

ある。

自分が気に入った男は手辺り次第に誘惑し、恋人や婚約者がいようがお構いなし。

節操が無いと断じてしまえば楽なのだが、如何せんマルケス家の令嬢である。おいそれと彼女を悪くは言え無いし、もし彼女の不貞を訴えようものならば、逆に父であるマルケス宰相によって潰されるのが関の山だ。

それで恋人・婚約者を寝取られた女性達は、アンナマリアに誘われた男の方から一方的に別れを告げられる。男達と言うと、一度だけの逢瀬で完全にアンナマリアの手管に陥落し、我も我もと彼女に結婚を申し込むのである。

既に彼女の悪行は知れ渡り、名花どころか、毒花だと知れ渡っている。

にも関わらず、アンナマリアが社交界の華だと言われるのには宰相であるロドリゴの力が働いているのだ。

俺もブリッグハウス伯爵家の出であるので、とりあえずの社交界と言うモノは知っている。軍に所属しているので華やかな場には出席した事は無いが、それでも漏れ聞こえてくるのは彼女の醜聞。

人の口に戸口は立てられないとは良く言ったものである。

実際王家主催の夜会警備をしている時に、同僚が彼女に誘われてそのまま関係を持った。

その一時の快楽のツケは辺境警備と言う、明らかに帝都勤務からの左遷だった。その裏に居たのは、言わずもがなの宰相だと言うのは

暗黙の了解だ。

そんな性に自由奔放な彼女の次の狙いが、まさか皇太子だとは。

「…マルケス嬢と皇太子殿下のご成婚…」

啞然として呟くと、ルーカスが鼻で笑いながらお茶に手を伸ばした。

「あの二人の事だ。とつくに既成事実は出来上がってるだろうし、あの娼婦の身体に嵌ったバカ兄貴が、あっさりと皇太子妃の椅子を差し出した事で宰相が何時になく元気だからな。全くどうしようもない奴等だ」

「ルーカスってばひどーい！僕の兄上を捉まえて『バカ兄貴』だなんて！」

「その割には目が笑ってる。アレックス」

「クリスも酷いなあ」

くすくすと笑っているアレクサンドロ王子は、いたくご機嫌だった。

尚も微笑んでいる三人の子供を前にして、一人の老人が何を考えているのかわからない分怖かった。

「…で、でも。それが俺と何の関係が…」

「ん？ブリッグハウス将軍ともあろう人がここまで教えてあげたのに、結構鈍いんだね」

「失礼だぞ、アレックス。それに肝心の事を言っていないんだぞ。すみません、将軍。」

「いや…それより肝心の事、とは…」

この時アレクサンドロ王子と、ルーカス・レイエス。クリスにクリストファー・マサイアスが俺に教えてくれた事。

そして、俺にしか頼めないと言って俺に頼んだ内容の衝撃は生涯忘れない。

何も知らなかった方が幸せだったのかもしれないと、何度も自問自答した事がある。

しかし、いくら南方将軍に出世したからと言って、俺の一生にあるかないかの大重要分岐点だったことは間違いない。

何も知らないで一軍人として安穩と生きるのか。

それとも――――

「『生きる伝説』の二つ名を持つ君に。是非とも僕の駒になって」

一旦言葉を切ったアレクサンドロ王子は、悪魔のように禍々しい笑顔を湛えてこう言った。

「ルグレスを…世界を創り直してみたいと思わない？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1078p/>

ルグレス帝国の皇帝陛下と二人の閣下

2011年10月31日21時23分発行